

風流仙

幸田露伴

青空文庫

発端 はつたん
 如是我聞 によぜがもん

上 いっとう
 一向專念の修業幾年 いくねん

三尊 さんぞん 四天王十二童子十六羅漢 らかん きては五百羅漢、までを胸中に蔵めて鉞小刀に彫り浮かべる腕前に、運慶も知らぬ人は讚歎すれども鳥仏師知る身の心耻かしく、其道 そのみち に志す事深きにつけておのが業の足らざるを恨み、爰日本美術国に生れながら今の世に飛驒の工匠なしと云わせん事残念なり、珠運命の有らん限りは及ばぬ力の及ぶ丈ケを尽してせめては我が好の心に満足さすべく、且は石膏細工の鼻高き唐人めに下目で見られし鬱憤の幾分を晴らすべしと、可愛や一向專念の誓を嵯峨の釈迦に立し男、齡は何歳ぞ二十一の春是より風は嵐山の霞をなぐつて腸断つ俳諧師が、蝶になれくと祈る落花のおもしろきをも眺むる事なくて、見ぬ天竺の何の花、彫りかけて永き日の入相の鐘にかなしむ程凝り固つては、白雨三条四条の塵埃を洗つて小石の面はまだ乾かぬに、空

さりげなく澄める月の影宿す清水しみずに、瓜浸うりして食いつゝ齒牙香しがこうと詩人の洒落しやれる川原の夕涼
 み快きをも余所よそになし、徒らいたずに垣かきをからみし夕顔の暮れ残るを見ながら白檀びやくだんの切り屑くず
 蚊遣かやりに焼たきて是も余徳とあり難がたかるこそおかしけれ。顔の色を林間の紅葉もみじに争あいて酒に
 暖めらるゝ風流の仲間にも入いらず、硝子越ガラスしの雪見こんぶに昆布ふとんを蒲団ふとんにしての湯豆腐すいを粋すいがる
 徒党とだうにも加くわらねば、まして島原しまばら祇園ぎおんの艶えん色しよくには横眼よこめ遣つかい一トつせず、おのが手作
 りの弁天よだれ様に涎流よだれして余念なく惚ほれ込み、琴三ことしやみせん味線あじなのあじな小歌こたは聞ききせねど、夢の中
 には緊那羅きんなんら神じんの声を耳にするまでの熱心ねつしん、あわれ毘首びしゆ竭摩かつまの魂こん魄ぼくも乗り移うつらでやあるべ
 き。かくて三年みつとせばかり浮世うきよを慕まつ直ちよくに渡ゆかり行ゆければ、勤こむるに追付おく悪魔あくまは無なき道理、
 殊ことさら幼少せうせうより備そなつての稟うまれつき賦つ、雪ゆきをまろめて達摩だるまを作り大根だいこんを斬きりて鸞うそどりの形かたちを写うつし、
 にさえ、屢人しばしばを驚おどかせしに、修業しゆぎやうの功こうを積つみ上あげ、憤ふん発ぱつの勇ゆうを加くえしなれば冴さえ腕うでは愈いよいよ
 々よ冴さえ鋭えいき刀とうは愈いよいよ鋭えいく、七歳しちさいの初しよ発はつ心しん二十四じふにの暁あけに成じやう道どうして師匠ししやうも是これまでなりと
 許ゆるすに珠運たちまは忽たちまち思おもひ立ち独身ひとりもの者の気楽きらくさ親讓おやぢりの家財けざいを売うつてのけ、いざや奈良鎌倉
 日光にくわに昔むかしの工匠たくみが跡訪あととわんと少すこし許ゆるの道具どうぐを肩かたにし、草鞋わらじの紐ひもの結むすいなれで度々たびたび解とけるを
 笑わらわれながら、物のあわれも是よりぞ知る旅。

下 苦勞は知らず勉強の徳

汽車もある世に、さりとは修業する身の痛ましや、菅笠は街道の埃に赤うなつて肌
 着に風呂場の虱を避け得ず、春の日永き暇に疲れては蝶うらくと飛ぶに翼羨ましく、秋
 の夜は淋しき床に寢覺めて、隣りの齒ぎしみに魂を驚かす。旅路のなさけなき事、風吹き
 荒み熱砂顔にぶつかると時眼を閉ぎてあゆめば、邪見の喇叭氣を注けるがらくの馬車に
 胆ちぐみあがり、雨降り切りては新道のさくれ石足を嚙むに生爪を剥し悩むを胴慾
 の車夫法外の価を貪り、尚も並木で五割酒銭は天下の法だとゆるする、仇もなさけも一日限
 りの、人情は薄き掛け蒲団に襟首さむく、待遇は冷な平の内に蒟蒻黒し。珠運
 素より貧きには馴れても、加茂川の水柔らかなる所に生長て初て野越え山越えのつらき
 を覚えし草枕、露に湿りて心細き夢おぼつかなくも馴れし都の空を遶るに無残や郭
 公待もせぬ耳に眠りを切つて破れ戸の罅隙に、我は顔の明星光りきらめくうら悲しさ、
 或は柳散り桐落て無常身に染る野寺の鐘、つく／＼命は森林を縫う稲妻のいと続き難き
 者と観ずるに付ても志願を遂ぐる道遠しと意馬に鞭打ち励ましつ、漸く東海道の名刹古
 社に神像木仏梁欄間の彫りまで見巡りて鎌倉東京日光も見たり、是より最後の樂は奈良じ

やと急ぎ登り行く碓氷峠うすいとうげの冬最中もなか、雪たけありて裾寒すそき浅間あさま下ろしの烈はげしきにめげず臆おそ
 せず、名に高き和田塩尻わだしおじりを藁沓わらくつの底に踏み蹂にじり、木曾路きそじに入りて日照山ひでりやま 栈橋かけはし 寢覚ねざめ
 後になし須原すはらの宿しゆくに着つきにけり。

第一 如是相

書けぬ所が美しさの第一義諦

名物に甘き物ありて、空腹に須原のどろゝ汁殊の外妙なるに飯幾杯か滑り込ませたる
 からだ此尽寝さするも毒とは思えど為る事なく、道中日記注け終いて、のつそつしながら
 身体を此尽寝さするも毒とは思えど為る事なく、道中日記注け終いて、のつそつしながら
 すすら煤びたる行燈の横手の楽落を讀ば山梨県土族山本勘介大江山退治の際一泊と
 ちびふで禿筆の跡、さては英雄殿もひとり旅の退屈に閉口しての御わざくれ、おかしき計りかあ
 われに覚えて初対面から膝をくずして語る炬燵に相宿の友もなき珠運、微なる埋火に
 脚を烘り、つくねんとして櫓の上の首投げかけ、うつらくとなる所へ此方をさして来る足
 音、しとやかなるは踵に亀裂きらせしき程の下女にあらず。御免なされと襖越しのやさ
 しき声に胸ときめき、為かけた欠伸を半分噛みて何とも知れぬ返辞をすれば、唐紙する

くくと開き^{ていねい}丁寧^{じぎ}に辞義^{しぎ}して、冬の日の木曾路^{きそじぎぞ}嘸^{おつ}や御疲^{おつかれ}に御座^まりましよ^うが御覽^{ごらん}下^{くだ}され
 是^{これ}は当所^{たうじよ}の名誉^{なむ}花^{はな}漬^{づけ}今年^{ことし}の夏^{なつ}のあつさをも越^こして今降^{いまふ}る雪^{ゆき}の真^ま最^{さい}中^{ちゆう}、色^{いろ}もあせずに
 居^おりまする梅桃桜^{うめとうおう}のあだくらべ、御意^{ごい}に入^いりましたら蔭^{かげ}膳^{ぜん}を信濃^{しなの}へ向^むけて人知^{ひとし}らぬ寒^かさ
 を知^しられし都^{みやこ}の御方^{ごかた}へ御土産^{ごみやげ}にと心憎^{こころにく}き愛^{あい}嬌^{きやう}言^{こと}葉^は商^{しょう}買^かの艶^{つや}とてなまめかしく売物^{うりもの}
 に香^かを添^そゆる口^{くち}のきゝぶりに利発^{りぱつ}あらわれ、世馴^{よな}れて洩^いらず、さりとして軽^{かる}佻^{はすみ}にもなき
 とりなし、持^もち来^{きた}りし包静^{つひずか}にひらきて二箱^{にせう}三箱^{さんせう}差^さし出^いす手^てつきしおらしさに、花^{はな}は余所^{よそ}に
 なりてうつゝなく覗^{のぞ}き込^こむ此方^{こなた}の眼^めを避^さけて背向^{そむ}くる顔^{かほ}、折^おから透間^{すきま}洩^いる風^{かぜ}に燈^{ともしび}火^ひ動^{うご}き
 明^あらかに見えざるにさえ隠^{かく}れ難^{がた}き美^うしさ。我^が折^おれ深山^{みやま}に是^{これ}は何物^{なにもの}。

第二 如是によぜたい体

粹すいの羯羅藍かららんと実じつの阿羅藍あららん

見て面白おもしろき世よの中に聞きて悲かなしき人ひとの上うへあり。昔むかしは此京このみやこにして此妓このこありと評判やぶさかは八坂やさかの塔たより高たかく其名そのなは音羽おとわの滝たきより響ひびきし室香むろかと云いえる芸子げいこありしが、さる程ほどに地主じしゆ権現こんげんの花はなの色いろ盛しやう者じや必衰ことわりの理ことわりをのがれず、梅岡うめおか何某なにがしと呼ばれし中国浪人ちゆうごくろうじんのきりゝとして男おとこらしきに契ちぎりを込こめ、浅あからぬ中ちゆうとなりしより他よその恋こひをば鼻負ひいきにする客きやくもなく、線香せんかうの煙たり絶たえだえ々たになるにつけても、よしやわざくれ身みは朝顔あさがおのと短みぢき命いのち、捨すて撥はちにしてからは恐おそろしき者ものにいうなる新徴組しんちやうぐみ何の怖こわい事ことなく三筋取みつじつても一筋心ひとすじこころに君きみさま大事だいじと、時ときを憚はばり世よを忍しのぶ男おとこを隠かく匿まし半年むねかあまり、苦勞くろうの中ちゆうにも助たすく神かみの結び玉たまいし縁ゆかりなれや嬉うれしき情なさけの胤なを宿なして帯おびの祝いわい芽出度めでたくの舒ゆるびし眉間みけんに忽たちち皺しわの浪立なみたちて騒さわがしき鳥羽伏見とばふしみの戦争せんそう。さ

ても方様の憎い程な氣強さ、爰なり丈夫の志を遂ぐるはと一ト群の同志を率いて官軍に
 加わらんとし玉を止むるにはあらねど生 死争う修羅の巷に踏入りて、雲のあなたの吾
 妻里、空寒き奥州にまで帰る事は云わずに旅立玉う離別には、是を出世の御発途
 と義理で暁して雄々しき詞を、口に云わする心が真情か、狭き女の胸に余りて案じ過せば
 潤む眼の、涙が無理かと、粹ほど迷う道多くて自分ながら思い分たず、うろくする内日
 は消て愈 《いよいよ》となり、義経袴に男 山 八幡の守りくけ込んで愚なと笑
 片類に叱られし昨日の声はまだ耳に残るに、今、今の御姿はもう一里先か、エ、せめて
 は一日路程も見透したきを役立ぬ此眼の腹立しやと門辺に伸び上りての甲斐なき線言
 それも尤なりき。一ト月過ぎ二タ月過ても此恨綿々ろくとして、筑紫琴習う隣家
 の妓がうたう唱歌も我に引き較べて絶ゆる事なく悲しきを、コロリン、チャンと済して貰
 い度しと無慈悲の借金取めが朝に晩にの掛合、返答も力無や男松を離れし姫蕪の、斯
 も世の風に飄らるゝ者かと俯きて、横眼に交張りの、袋戸に広重が絵見ながら、悔し
 いにつけゆかしさ忍ばれ、方様早う帰つて下されと独言口を洩るれば、利足も払わ
 ず帰れとはよく云えた事と吠付れ。ア、大きな声して下さるな、あなたにも似合わぬと
 云いさして、御腹には大事のく我子ではない顔見ぬ先からいとしゆうてならぬ方様の

紀念、唐土には胎教という事さえありてゆるがせならぬ者と或夜の物語りに聞しに此あ
 りさまの口惜と腸を断つ苦しき。天女も五衰ぞかし、玳瑁の櫛、真珠の根掛いつか無
 くなりては華鬢の美しかりける佛とどまらず、身だしなみ懶くて、光ると云われし色艶
 屈托に曇り、好みの衣裳数々彼に取られ是に易えては、着古しの平常衣一つ、何の焼
 かけの靈香薫ずべきか、泣き寄りの親身に一人の弟は、有つても無きに劣る賭博好き
 酒好き、落魄て相談相手になるべきならねば頼むは親切な雇婆計り、あじきなく暮
 らす中月満て産声美しく玉のような女の子、辰と名付られしはあの花漬売りなりと、
 是も昔は伊勢参宮の御利益に粹という事覚えられしらしき宿屋の親爺が物語に珠運も木像
 ならず、涙掃つて其後を問えば、御待なされ、話しの調子に乗って居る内、炉の火が淋
 しゆうなりました。

第三 如是性

上 母は嵐に香の迸る梅

やまが 山家の御馳走は何処も豆腐湯波干鮭計りなるが今宵はあなたが態々茶の間に御出掛
 にて開化の若い方には珍らしく此元爺の話の冒頭から潰さずに御聞なさるが快ければ、
 夜長の折柄お辰の物語を御馳走に饒舌りましょう、残念なは去年ならばもう少し面白
 くあわれに申し上て軽薄な京の人イヤ是は失礼、やさしい京の御方の涙を木曾に落さ落
 させよう者を惜しい事には前歯一本欠けた所から風が洩れて此春以来御文章を読も下手
 になつたと、菩提所の和尚様に云われた程なれば、ウガチとかコガシとか申す者は空
 抜にしてと断りながら、青内寺煙草二三服馬士張りの煙管にてスパリくと長閑に吸
 い無遠慮に櫂さし焼べて舞い立つ灰の雪袴に落ち来るをぼんと擲きつ、どうも私幼少

から読本を好きました故か、斯いう話を致しますると凶に乗っておかしな調子になるそ
 うで、人我の差別も分り憎くなると孫共に毎度笑われますが御聞づらくも癖ならば
 癖ぞと御免なされ。さてもそののち室香はお辰を可愛しと思ふより、情には鋭き女の勇
 気をふり起して昔取つたる三味の撥、再び握つても色里の往来して白痴の大尽、生な通
 人めらが間の周旋、浮れ車座のまわりをよくする油さし商売は嫌なりと、此度は象
 牙を柁に易えて児供を相手の音曲指南、芸は素より鍛錬を積たり、品行は淫ならず、
 且は我子を育てんという気の張あればおのずから弟子にも親切あつく良い御師匠様と世
 に用いられて爰に生計の糸道も明き細いながら炊煙絶せず安らかに日は送れど、稽古する
 小娘が調子外れの金切声今も昔わーワツとお辰のなき立つ事の屢なるに胸苦しく、苦勞
 ある身の乳も不足なれば思い切つて近き所へ里子にやり必死となりて稼ぐありさま余所の
 眼さえ是を見て感心なと泣きぬ。それにつれなきは方様の其後何の便もなく、手紙出
 そうにも当所分らず、まさかに親子笈つるかけて順礼にも出られねば逢う事は夢に計
 り、覚めて考うれば口をきかれなかつたはもしや流丸にでも中られて亡くなられたか、
 茶絶塩絶きつとして祈るを御存知ない筈も無かろうに、神様も恋しらずならあり難く
 なしと愚痴と一所にこぼるゝ涙流れて止らぬ月日をいつも憂いに明し恨に暮らして

我齡わがとしの寄るは知ねども、早い者お辰はちよろゝ歩行あるき、折ふしは里親と共に来てまわらぬ舌に菓子ねだる口元、いとしや方様に生き写しと抱き寄せて放し難く、遂に三歳の秋より引き取つて膝ひざもと下に育れば、少しは紛れて貧家に温ぬくき太陽のあたる如く淋びしょしき中にも貴たかき笑わらいの唇に動きしが、さりとは此子の愛らしきを見様とも仕玉したたまわざるか帰家かえられざるつれなさ、子供心にも親は恋しければこそ、父様御帰りになつた時は斯こうして為する者ぞと教えし御辞誼おじぎの仕様しよう能く覚えて、起居動作たちいふるまいのしとやかさ、能く仕付しつけたと誉ほめらるゝ日まちを待て居るに、何処どこの童りゆうぐう宮へ行かれて乙姫おとひめの傍そばにでも居らるゝ事ぞと、少しは邪推りんきぎざの悋あだな気萌あだなすも我を忘れられしより子を忘れられし所には起る事、正しき女にも切なき情じやうなるに、天道怪しくも是これを恵あづかりませず。運は賽さいの眼の出所でどころ分らぬ者にてお辰の叔父おじぶんなげの七しちと諱名あだな取りし蕩樂どつらく者、男は好よければ根性こんじやう凶太たく誰にも彼にも疎うとまれて大の字に寝たとて一坪には足らぬ小さき身を、広き都に置きかね漂ただよ泊あるきの渡り大工、段々と美濃路みのじを歴へて信濃しなのに來り、折しも須原すはらの長者何がしの隱居所いんきよ所作る手伝てんい柱を削れ羽目板うめを付つけると棟梁とうりやうの差さ図には従したがえど、墨繩すみなわの直すくには倣ならわぬ横道おうじやう、お吉様と呼よばせらるゝ秘藏ひざうの嬢ぢやう様にやさしげな濡ぬれを仕掛かけ、鉋かんな屑くずに墨すみさし思おもいを云いわせでもしたるか、とうゝそゝのかしてとんでもなき穴掘り仕事、それも縁ゆかりなら是非せひなしと愛あに暗くらんで男の性質しやうも見分みわけぬ長者のえ

せ粹^{すい}三国一の狼^{おおかみ}媚^{むこ}、取^とつて安堵^{あんど}したと知らぬが仏様に其^{その}年^{とし}なられし跡^{あと}は、山林^{いんえん}家蔵^{けぞう}
 椽^{えん}の下の糠味^{ぬかみ}噲瓶^{そがめ}まで譲^{ゆづ}り受^うけて村中^{じゆうちゆう}寄り合^あひの席^{せき}に肩^{かた}ぎしつかせての正坐^{しようざ}、片腹^{ぺんぷく}痛^{いた}き
 世^よや。あわれ室香^{むろか}はむら雲迷^{のわけ}い野分^{のわけ}吹^ふく頃^{ころ}、少^すしの風邪^{かぜ}に冒^かされてより枕^{まくら}あがらず、秋^{あき}の
 夜冷^{ひややか}に虫^{むし}の音遠^{とほ}ざかり行くも観念^{くわんねん}の友^{とも}となつて独^{ひとり}り寢覚^{ねざめ}の床淋^{とせ}しく、自^{みづか}ら露霜^{るうそう}のやがて消^{きえ}
 ぬべきを悟^{さと}り、お辰素^{すじゆう}性^{じやう}のあらまし慄^{ふる}う筆^{ふで}のにじむ墨^{すみ}に覺^{おぼつか}束^{したた}なく認^{したた}めて守^{まも}り袋^{ふくろ}に父^{ちち}が
 書^かき捨^{すて}の短^{たんざく}冊^ひ一^{いつ}トひらと共^{とも}に蔵^{おさ}めやりて、明^あ日^{にち}をもしれぬ我^わがなき後^{のち}頼^{たの}りなき此^{この}子^こ、如^{ごと}
 何^かなる境界^{かうがい}に落^おつるとも加^か茂^もの明^あ神^{かみ}も御^ご憐^{れん}愍^{みん}あれ、其^{その}人^{ひと}命^{いのち}あらば巡^{めぐ}り合^あわせ玉^{たま}いて、芸^{げい}子^こ
 も女^めなりやさしき心^{こころ}入^いれ嬉^{うれ}しかりきと、方^{かた}様^{さま}の一^{いつ}言^{こと}を草^{くさ}葉^はの蔭^{かげ}に聞^きせ玉^{たま}えと、遙^{よう}拝^{はい}し
 て閉^とじたる眼^{まなこ}をひらけば、燈^{ともしび}火^び僅^{わず}に螢^{かほ}の如^{ごと}く、弱^{よわ}き光^{ひかり}りの下^{もと}に何^{なに}の夢^{ゆめ}見^みて居^ゐるか罪^{つみ}のな
 き寝^ね顔^{がほ}、せめてもう十^と計^{けい}りも大^{おほ}きゆうして銀^い杏^{じやう}鬚^{まげ}結^{むす}わしてから死^しにたしと袖^{そで}を嚙^かみて忍^{しの}
 び泣^なく時^{とき}お辰^{おしん}魔^まわれてアツと声^{こゑ}立^たて、母^{かか}様^{さま}痛^{いた}いよ坊^{ぼう}の父^{とと}様^{さま}はまだ帰^かえらないかえ、
 源^{げん}ちゃん打^ぶつから痛^{いた}いよ、父^{とと}の無^ないのは犬^{いぬ}の子^こだつてぶつから痛^{いた}いよ。オ、道^{みち}理^りじや
 と抱^{かか}き寄^よすれば其^{その}儘^{まま}すやくと睡^{ねむ}るいじらしき、ア、死^しなれぬ身^みの疾^{やま}病^び、是^{これ}ほどなさけな
 き者^{もの}あろうか。

下 子は岩蔭に咽ぶ清水よ

格子戸がらくとあけて閉る音は静なり。七蔵衣装立派に着飾りて顔付高慢くさく、
 無沙汰謝るにはあらで誇り氣に今の身となりし本末を語り、女房に都見物致させかた
 おちかづきに連て参つたと鷹風なる言葉の尾につきて、下ぐる頭低くしとやかに妾
 めは吉と申す不束な田舎者、仕合せに御縁の端に続がりました上は何卒末長く御眼か
 けられて御不勝ながら真実の妹とも思しめされて下さりませと、演る口上に樸厚なる山
 家育ちのたのもしき所見えて室香嬉敷、重き頭をあげてよき程に挨拶すれば、女心の
 やわらかなさけ。姉様の是ほどの御病氣、殊更御幼少のもあるを他人任せにして置
 きまして祇園清水金銀閣見たりとて何の面白かるべき、妾は是より御傍さらず御看病致し
 ましよと云えば七蔵顔膨らかし、腹の中には余計なと思ひ乍ら、ならぬとも云い難く、そ
 れならば家も狭しおれ丈ケは旅宿に帰るべしといつて其晩は夜食の膳の上、一酌の酔
 に浮れてそゞろあるき、鼻歌に酒の香を吐き、川風寒き千鳥足、乱れてぼんと町か川端
 あたりに止まりし事あさまし。室香はお吉に逢いてより三日目、我子を委ぬる処を得て気
 も休まり、爰ぞ天の恵み、臨終正念たがわず、安かなる大往生、南無阿弥陀仏は嬌

喉こうに粹すいの果はてを送り 三 重さんじゆう、鳥部野とりべの一片けむりの烟けむりとなつて御法みのりの風かぜに舞い扇あふぎ、極楽ごくらくに歌舞かぶの
 女菩薩にょぼさつ一員いちにん増ましたる事こと疑うたがいなしと様子ようす知りたる和尚おしょうさま様さま随喜ずいきの涙なみだを落おされし。お吉おきち其その
 儘のままあるべきにあらねば雇ばい婆ばには銭かねやつて暇取ひまらせ、色々かたたく片付かたづくるとて持じ仏棚ぶつだなの奥おくに
 一つの包つつみもの物ものあるを、不思議ふしぎと開ひらき見れば様々さまざまの貨幣かね合あせて百円ひゃくえん足たらず、是こゝろはと驚おどきて
 能よくよく々よく見るに、我身わがみ万ま一の時ときお辰たつ引き取とつて玉たまわる方かたへせめてもの心こゝろ許ゆるりに細こき暮くら
 しの中うちより一銭いちせん二銭にせん積たみ置おきて是こゝろをまいらするなりと包かみ紙しに筆ふでの跡あと、読よみさして身みの毛け
 立つ程ほど悲かなしく、是こゝろまでに思おもひ込こまれし子を育やしなへずに置おかれべきかと、遂ついに五歳いつつのお辰たつをつれ
 て夫おとこと共に須原すはらに戻もりけるが、因果いんぐわは壺つぼ皿ざらの縁ふちのまわり、七歳しちさい本性ほんしやうをあらわして不足ふそくな
 き身に長半ながはんをあらそえば段々だんだん悪徒あくとの食く物ものとなりて瘦やせる身代みしろの行ゆく末すえを氣遣きづかい、女房にようぼうう
 るさく異見いけんすれば、何なにの女によの知しらぬ事こと、ぴんからきりまで心得こころえて穴あな熊毛くまけ綱づなの手品てづまにかゝ
 る我われならねば負おける計はかりの者ものにはあらずと駈かけだし出でして三日さんじつ帰かへらず、四日よっぴ帰かへらず、或あるは松本まつもと
 善光寺ぜんくわうじ又は飯田いひだ高遠たかとおあたりの賭場とぼあるき、負まれば尚なほも盜賊どろぼうに追おい銭ぜにの愚おろを尽つくし、勝かて
 ば飯盛いひもりに祝いわい酒さけのあぶく銭ぜにを費つす、此この癖くせ止とめて止とまらぬ春駒はるこまの足搔あが早く、坂道さかみちを飛とび
 び下おりるより迅すみやかに、親讓おやぢりの山やまも林はやしもなくなりかゝつてお吉おきち心配しんぱいに病死びやくしせしより、齡としは僅わずか
 十との冬ふゆ、お辰たつ浮世うきよの悲かなしみを知しりそめ叔父おじの帰宅かえらぬを困こまり途方とほうに暮くれ居ゐたるに、近所きんじよの人ひと

々、彼奴め長久保のあやしき女の許に居続して妻の最期を余所に見る事憎しとてお辰を
 あわれみ助け葬式済したるが、七蔵此後愈身持放埒となり、村内の心ある者には爪
 はじきせらるゝをまかまわず遂に須原の長者の家敷も、空しく庭中の石燈籠に美しき苔
 を添えて人手に渡し、長屋門のうしろに大木の樫の梢吹く風の音ばかり、今の耳にも替ら
 ずして、直其傍なる荒屋に住いぬるが、さても下駄の齒と人の氣風は一度ゆがみて一
 代なおらぬもの、何一トつ満足なる者なき中にも盃のみ欠かけず、柴木へし折つて箸にし
 ながら象牙の骰子に誇るこそ愚なれ。かゝる叔父を持つ身の当惑、御嶽の雪の肌清らか
 に、石楠の花の顔氣高く生れ付てもお辰を嫁にせんという者、七蔵と云う名を聞ては
 山抜け雪流より恐ろしくおぞ毛ふるつて思い止れば、二十を越して痛ましや生娘、昼は
 賃仕事に肩の張るを休むる間なく、夜は宿中の旅籠屋廻りて、元は穢多かも知れぬ客
 達にまで黽られながらの花漬売、帰途は一日の苦勞の塊り銅貨幾箇を酒に易えて、
 御淋しゅう御座りましたらう、御不自由で御座りましたらうと機嫌取りどり笑顔してまめ
 やかに仕うるにさえ時々は無理難題、先度も上田の娼妓になれと云い掛しよし。さりと
 ては胴慾な男め、生餌食う鷹さえ暖め鳥は許す者を。

第四 如是因

上 忘れぬのが根本の情

珠運しゆうんは種々さまさまの人のありさま何と悟るべき者とも知らず、世のあわれ今宵こよい覚えて屋やの角に鳴る山風寒さ一段身に染しみ、胸痛きまでの悲しさ我事わがことのように鼻詰はなづめらせながら亭主に礼云らいいいておのが部屋へやに戻もどれば、忽たちまち気が注つくは床の間に二夕箱買ふたゆふばいつたる花漬はなづけ、衣脱きぬぎかえて転ころりと横になり、夜着よぎ引きかぶればありくと浮うぶお辰たつの姿、首くびさし出して眼めをひらけば花漬はなづけ、閉とずればおもかげ、是これはどうじやと呆あきれてまた候眼ぞろをあけば花漬はなづけ、ア、是を見ればこそ浮世話うきわも思おもいの種かたとなつて寝られざれ、明日は馬籠峠まごめとうげ越えて中津川なかつがわ迄行いたかんとするに、能よく休やすまでは叶かなわじと行あんどん燈あんとん吹き消し意いを静しずむるに、又しても其その美形みかた、エ、馬鹿ばかなと活かつと見みひらき天井てんじやうを睨にらむ眼めに、此度このたびは花漬はなづけなけれど、闇やみはあやなしあやにくに梅の花うめのはなの

香は箱を洩れてするくと枕に通えば、何となくときめく心を種として咲も咲たり、桃の媚桜の色、さては薄荷菊の花まで今真盛りなるに、蜜を吸わんと飛び来る蜂の羽音どこやらに聞ゆる如く、耳さえいらぬ事に迷つては愚なりと瞼堅く閉じ、搔巻頭を蔽うに、さりとは怪しからず麗しき幻の花輪の中に愛嬌を湛えたるお辰、気高き計りか後光朦朧とさして白衣の観音、古人にも是程の彫なしと好きな道に恍惚となる時、物の響は冴ゆる冬の夜、台所に荒れ鼠の騒ぎ、憎し、寝られぬ。

下 思いやるより増長の愛

裏付股引に足を包みて頭巾深々とかつぎ、然も下には帽子かぶり、二重とんびの扣釦惣掛になし其上首筋胴の周圍、手拭にて動かぬ様縛り、鹿の皮の袴に脚半油断なく、足袋二枚はきて藁沓の爪先に唐辛子三四本足を焼ぬ為押し入れ、毛皮の手甲して若もの時の助けに足櫃まで脊中に用意、充分してさえ此大吹雪、容易の事にあらず、吼立る天津風、山山鳴動して峰の雪、梢の雪、谷の雪、一斉に舞立つ折は一寸先見え難く、瞬間に路を埋め、脛を埋め、鼻の孔まで粉雪吹込んで水に溺れしよりまだく

苦し、ましてや準備おろかなる都の御客様なんぞ命惜くば御逗留なされと朴訥は仁に
 近き親切。なるほど話し聞てさえ恐ろしければ珠運別段急ぐ旅にもあらず。されば今日
 丈の厄介になりましようと尻を炬燵に居て、退屈を輪に吹く煙草のけぶり、ぼんやりと
 して其辺見回せば端なく眼につく柘植のさし櫛。さては花漬売が心づかず落し行しかと
 手に取るとたん、早や其人床しく、昨夕の亭主が物語今更のように、思い出されて、叔
 父の憎きにつけ世のうらめしきに付け、何となく唯お辰可愛く、おれが仏なら、七蔵頓
 死さして行衛しれぬ親にはめぐりあわせ、宮内省よりは貞順善行の緑綬紅綬紫綬、
 あり丈の褒章頂かせ、小説家には其あわれおもしろく書かせ、祐信長春等と呼
 び生して美しさ充分に写させ、そして日本一大々尽の嫁にして、あの雑綴の木綿着を
 綾羅錦繡に易え、油気少きそ、け髪に極上々正真伽羅梅檀の油付させ、握
 飯ほどな珊瑚珠に鉄火箸ほどな黄金脚上げてさ、してやりたいものを神通なき身
 の是非もなし、家財売て退けて懐中にはまだ三百兩余あれど是は我身を立る基、道中にも
 片足満足な草鞋は捨ぬくらい儉約して居るに、絹絞の半掛一トつたりとも空に恵
 む事難し、さりながらあまりの慕わしき、忘れぬ殊勝さ、かゝる善女に結縁の良き
 方便もがな、噫思付たりと小行李とくく、小刀取出し小さき砥石に鋒尖鋭く礪ぎ上

げ、頓やがて櫛くしの棟むねに何やら一日掛りに彫り付、紙に包んでお辰来らばどの様な顔するか待ちかけしは、恋は知らずの粹すい様さまめ、おかしき所しよぎよ業ごうあてが外れて其晚吹雪尚なほやまず、女の何としてあるかるべきや。されば流れざるに水の溜たまる如ごとく、逢あわざるに思おもは積いりて愈いよいよなつかしく、我は薄暗うすき部屋うちの中、煤すすびたれども天井の下、赤くはなりてもまだ破やれぬ畳の上に坐ざし、去歳こぞの春はるすが漏もりたるか怪あしき汚染しみは滝たきの糸いとを乱みだして画襖えぶすまの李白りはくの頭かしらに濺そそげど、たて付つけよければ身の毛立程たつの寒ふさを透すき間に唧かこちもせず、兔とも角かくも安楽あんらくにして居ゐるにさえ、うら寂おのしく自悲おのを知るに、ふびんや少女おとめの、あばら屋といえば天井も無なかるべく、屋根裏しばたは柴焼しばたく煙けむりりに塗ぬられてあやしげに黒く光り、火口ほくちの如ごとき煤すすは高山こうざんの樹きにかゝれる猿尾さるおがせ柳やなぎのようにながりにたると、あのしなやかなる黒髪ひきつめ引ひ詰つめに結むすんで、腸見はらわたえたるぼろ畳たたみの上に、香露こうろうこ凝こる半なかに壁尚たまお 《いまいま》しそくに睨ねめたる眼めをジロリと注つぎ、裁し縫とに急いがしき手を止とめて無理むりな吩咐いひつけ、跡あと引き上戸じやうしやの言葉ことばは針はり、とがくしきに胸むねを痛いためて答こたへるお辰おちんは薄着はくの寒ふさに慄ふるう歟や唇くちびる、それに用よう捨すもあらしき風かぜ、邪見やまに吹ふくを何防なにぼうぐべき骨露あちわれし壁ひとえ一重ひとえ、たるみの出来きたる筵屏風むしろ、あるに甲斐かいなく世よを経たれば貧ふには運うも七分凍しちぶりて三分さんぶの未練まゐを命いのちに生いるか、噫あと計はかりに夢ゆめ現あ分わたず珠たま運うは歎たんずる時とき、雨戸あまどに雪ゆきの音ねさらくとして、火かは消きえる炬燵こたつに足あしの先冷つめかりき。

第五 如是作によぜさ

上 我を忘れて而生其心にしようごしん

よしや脊せに暖あたならずとも旭あさひ日ひきらくときしのぼりて山々の峰の雪に移りたる景色、眼め
 も眩くらむ許ばかりの美しき、物もの腥ぐさき西洋の塵ちりも此ここ処こまでは飛とんで来きず、清しやうじやう淨じやう潔けつ白はく実げに頼たの母も
 敷き岐き蘇そ路じ、日本国の古風残りて軒近く鳴く小鳥の声、是これも神代を其その儘ままと詰つまらぬ者をも
 面白く感ずるは、昨宵ゆうべの嵐あらし去りて跡なく、雲の切れ目の所所、青空見ゆるに人の心の悠々
 とせし故なるべし。珠しゆうん運うん梅干ばい渋じゆ茶ちやに夢を拭ぬぐい、朝飯はんふだん平常へいじやうより甘うまく食くいて泥じろを踏ふまぬ雪ゆき
 沓つかろ軽かろく、飄ひやう々ひやうと立たち出いでしが、折角わが吾ご志しを彫くりし櫛くし与よえざるも残念、家は宿おやじの爺ききに聞き
 て街道かたえわの傍かたを僅わずか折かたり曲まりたる所と知れば、立ち寄りて窓からでも投なり込こまんと段々行くに、
 果はたせる哉かな縦なみの木高たかく聳そびえて外そと圍いい大おほきく如何いかにも須す原はらの長なが者が昔すまの住すま居いと思おもはるゝ立た派はな

家の横手に、此頃の風吹き曲めたる荒屋あり。近付くまゝに中の様子を伺えば、寥然として人のありとも想われず、是は不思議とやぶれ戸に耳を付て聞けば竊々と呟や
 くような音、愈あやしく尚耳を澄せば噉り泣する女の声なり。さては邪見な七蔵め、何
 事したるかと思ひ、此さがして大きな節の抜けたる所より覗けば、鬼か、悪魔か、言語同
 断、当世の摩利夫人とさえ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑えて何者の仕業ぞ、酷らし
 き縄からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩
 いし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪恨は長く垂れて顔にかゝり、衣
 引まくれ胸あらわに、膚は春の曙の雪今や消入らん計り、見るから忽ち肉動き肝躍つて分
 別思案あらばこそ、雨戸蹴ひらき飛込で、人間の手の四五本なき事もどかしと急燥まで
 忙しく、手拭を棄て、縄を解き、懐中より櫛取り出して乱れ髪梳けと渡しながら冷え凍
 りたる肢体を痛ましく、思わず緊接抱き寄せて、嘸や柱に脊中がと片手に摩で擦するを、
 女あきれて兎角の詞はなく、ジツと此方の顔を見つめらるゝにきまり悪くなつて一ト足離
 れ退くとたん、其辺の畳雪だらけにせし我杳にハツと気が注ぎ、訳も分らず其まゝ外へ
 逃げ出し、三間ばかり夢中に走れば雪に滑りてよろゝゝ、あわや膝突かんとしてドツ
 コイ、是は仕たり、蝙蝠傘手荷物忘れたかと跡もどりする時、お辰門口に來り袖を捉え

て引くにふり切れず、今更余計な仕業したりと悔むにもあらず、恐るゝにもあらねど、一生に覺なき異な心持するにうろつきて、土間に落散る木屑なんぞの詰らぬ者に眼を注ぎ上り端に腰かければ、しとやかに下げたる頭よくも挙げ得ず。あなたは亀屋に御出なされた御客様わたくしの難儀を見かねて御救下されたは真にあり難けれど、到底遁れぬ不仕合せと身をあきらめては断念なかつた先程までの愚が却つて口惜う御座りまする、訳も申さず斯う申しては定めて道理の分らぬ奴めと御軽侮も耻しゆうはござりまするし、御慈悲深ければこそ縄まで解て下さつた方に御礼も能は致さず、無理な願を申すも真に苦しゆうは御座りまするが、どうぞわたくしめを元の通りお縛りなされて下さりませと案の外の言葉に珠運驚き、是はくゝとんでもなき事、色々入り込んだ訳もあろうがさりとては強ねなきおたの面御頼み、縛つた奴を打てとでも云うのならば瘦腕に豆計の力、瘤も出しましょうが、いとしゆうていとしゆうて、一日二晩絶間なく感心しつめて天晴菩薩と信仰して居る御前様を、縛ることは赤旃檀に飴細工の刀で彫をするよりまだ難し、一昨日の晩忘れて行かれたそれくゝその櫛を見ても合点なされ、一体は亀屋の亭主に御前の身の上あらまし聞て、失礼ながら慙然な事や、私が神か仏ならば、斯もしてあげたい彼もしてやり度と思いましたが、それも出来ねばせめては心計、一日肩を凝らして漸く其

られしはあまり浮世を恨みすぎた云い分、道理には合つても人情には外れた言葉が御前の
その美しい唇から出るも、思えば苦しい仔細があつてと察しては御前の心も大方は見えて
いじらしく、エ、腹立しい三世相、何の因果を誰が作つて、花に蜘蛛の巣お前に七
蔵の縁じややらと、天燈様まで憎うてならぬ此珠運、相談の敵手にもなるまいが痒
い脊中は孫の手に頼めじや、なよなよとした其肢体を縛つてと云うのでない注文ならば
天窓を破つて工夫も仕様が一体まあどうした訳か、強て聞でも無れど此儘別れては何と
やら仏作つて魂入れずと云う様な者、話してよき事ならば聞た上でどうなりと有丈の力
喜んで尽しまししようと云れてお辰は、叔父にさえあさましき難題云い掛らるゝ世の中に
赤の他人ではほどの仁、胸に堪えてぞつとする程嬉し悲しく、咽せ返りながら、吃と思ひ
かえして、段々の御親切有り難は御座りまするが妾身の上話しは申し上ませぬ、否や申さ
ぬではござりませぬが申されぬつらさを御察し下され、眼上と折り合ねば懲らしめられた
計の事、諄々と黒暗の耻を申てあなたの様な情知りの御方に浅墓な心入と愛想
つかさるゝもおそろし、さりとて夢さら御厚意蔑にするにはあらず、やさしき御言葉は骨
に鏤んで七生忘れませぬ、女子の世に生れし甲斐今日知りて此嬉しさ果敢なや終り初物、
あなたは旅の御客、逢も別れも旭日があの木梢離れぬ内、せめては御荷物なりとかつぎて

三戸野馬籠あたりまで御肩を休ませ申したけれどそれも叶わず、斯云う中にも叔父様帰られては面倒、どの様な事申さるゝか知れませぬ程にすぎなく申すも御身の為、御迷惑かけては済ませぬ故どうか御帰りなされて下さりませ、エ、千日も万日も止めたき願望ありながら、と跡の一句は口に洩れず、薄紅となつて顔に露るゝ可愛さ、珠運の身になつてどうふりすてらるべき。仮令叔父様が何と云わりようが下世話にも云う乗りかゝつた船此儘左様ならと指を噉えて退くはなんぼ上方産の胆玉なしでも仕憎い事、殊更最前も云うた通りぞつこん善女と感じて居る御前の憂目を余所にするは一寸の虫にも五分の意地が承知せぬ、御前の云わぬ訳も先後を考えて大方は分つて居るから兎も角も私の云事に付たがよい、悪気でするではなし、私の詞を立て呉れても女のすたるでもあるまい、斯しましよ、是からあの正直律義は口つきにも聞ゆる亀屋の亭主に御前を預けて、金も少しは入るだろうがそれも私がどうなりとして婿を明しましょう、親類でも無い他人づらが要らぬ差出た才覚と思わるゝか知らぬが、妹という者持ても見たらば斯も可愛い者であらうかと迷う程いとしゆうてならぬ御前が、眼に見えた艱難の淵に沈むを見ては居られぬ、何私が善根為たがる慾じやと笑うて気を大きく持がよい、さあ御出と取る手、振り払わば今川流、握り占なば西洋流か、お辰はどちらにもあらざりし無学の所、無類珍

重嬉しかりしと珠運後に語りけるが、それも其時は嘘なりしなるべし。

下 弱よわきほどこに施ほすに能のういむい以む無畏

コレ吉兵衛きちべえ、御談義流おの御説諭をおれに聞かせるでもなからう、御氣の毒だが道理と命と二つならべてぶんなげの七様しちやう、昔は密男まおとこ 拐かどわか 帯おとも仕てのけたが、穩おとなしく 当あなつて姪め子こを売うるのではない養女めかけだか妾めかけだか知らぬが百兩で縁を切きつて呉くれるという人に遣やばかり事こと、それをお辰たつが間夫まぶでもあるか、小間癩こましかくれて先の知れぬ所へ行ゆくは否いやだと吼ほえつら顔かいて逃にげでも仕しそうな様子ようすだから、買手かひての所へ行ゆく間ま一寸ちよつと縛おつて置おいたのだ、珠運しゅうんとかいう二才野郎にさいやうらうがどういうように続つきで何なにの故障こしょう。七しち、七しち、静しずかにしろ、一い体てい貴様きやうが分わらぬわ、貴様きやうの姪めだが貴様きやうと違ちがつて宿しゆく中ちゆうでの誉ほまれもの者もの、妙齡としごろになつても白粉おしろい一いトつ付つけず、盆正月ぼんしょうげつにもあら、木きの下駄げた一い足あし新規しんきに買かおうでもないあのお辰ちん、叔父しやくふなればとて常とこ不ふ断だん能のうも貴様きやうの無理むりを忍しのんで居ゐる事ことぞと見みる人ひとは皆みな、齒切はぎしりを貴様きやうに噛かんで涙なみだをお辰ちんに飜こぼすは、姑こに凍こ飯めし食くわするような冷ひやいこの嫁よめも、お辰ちんの話わ聞きては急いそに角つのを折おつてやさしく夜長よながの御慰ごゐみに玉子湯たまごゆでもして上あましようかと老としより人ひとの機嫌きげんを取とるきになるぞ、それを先度せんども上田うへだの女め

術に渡そうとした人非人め、百両の金が何で要るか知らぬがあれ程の悌順女を金に易らるゝ者と思うて居る貴様の心がさもしい、珠運という御客様の仁情が半分汲めたならそんな事云わずに有難涙に咽びそうな者。オイ、亀屋の旦那、おれとお吉と婚禮の媒妁役して呉れたを恩に着せるか知らぬが貴様々々は廃て下され、七七四十九が六十になつてもあなたの御厄介になろうとは申ませぬ、お辰は私の姪、あなたの娘ではなしさ、きり／＼此処へ御出なされ、七が眼尻が上らぬうち温直になされた方が御為かと存じます、それともあなたは珠運とかいう奴に頼まれて口をきく計りじや、おれは当人じや無れば取計いかねると仰やるならば其男に逢いませよ。オ、其男御眼にかゝろうと珠運立出、つく／＼見れば鼻筋通りて眼つきり／＼しく、腮張りて一ト癖確にある悪物、膝すり寄せて肩怒らし、珠運とか云う小二才はおのれだな生弱々しい顔をして能もお辰を拐帯した、若いには似ぬ感心な腕、併し若いの、鬪鶏の前では地鶏はひるむわ、身の分限を知らぬ尻尾をさげて四の五のなしにお辰を渡して降参しろ。四の五のなしとは結構な仰せ、私も手短く申しませよならお辰様を売せたくなければ御相談。ふぎけた囁語は置いてくれ。コレ七、静に聞け、どうか売らずと済む工夫をと云うをも待たず。全体小癩な旅鳥と振りあぐる拳。アレと走り出るお辰、吉兵衛も共に止ながら、七蔵、七蔵、さてもそなた

は智慧ちえの無い男、無理うらに売うずとも相談つかのつきそうな者を。フ相談つか付めぬは知れた事、百両出
 すなら呉くれてもやろうがとお辰とらを捉とらえ立たち上ある裙すそを抑おえ、吉兵衛きちべゑの云いう事ことをまあ下に居いて
 よく聞きけ、人の身みを売うり買かいするといいうは今こん日にちの理りに外あれた事、娼妓じやうぎにするか妾めかけに出いす
 か知らぬが。エ、喧やか擾ましいわ、老おい耄ぼれ、何なににして食くおうがおれの勝手かた、殊更ことごと内金うちかね二十両にじゅうりやうま
 で取とつて使しつて仕舞しまつた、変へん改がはととも出来いぬ大きおほきに御世話ごせわ、御茶ごちやでもあがれとあくま
 ののしの罵ののり小こ兔うさぎ攫つかむ驚おどろの眼まなざし恐おそろしく、亀屋かめやの亭主ていしゆも是これまでと口くちを噤つぶむありさま珠運くちお口
 惜おしく、見みればお辰とらはよりどころなき朝顔あさがおの嵐あらしに逢あひあつて露脆もろく、此方こなたに向むかひあつて言葉ことばはなく
 深く礼れいして叔父おじいに付つき添そ立たち出いる二夕ふたゆふ足あし三足さんあしめ、又また後うしろふり向むかひあつて其そのあわれさ、八幡はちまん命いのちかけ
 て堪忍かんなんならずと珠運くちお七しちと呼留よびとめ、百両物ひゃくりやうものの見事けんじに投出なして、亭主ていしゆお辰とらの驚おどろろくくも関かまわず、手て
 続つづ油断ゆだんなく此この悪人あくにんと善女ぜんによの縁ゆかりを切りてめでたしく、まずは亀屋かめやの養女やしやう分ぶんとなしぬ。

第六 如是縁

上 種子一粒が雨露に養わる

自分 妾 狂しながら息子の傾城買を責る人心、あさましき中にも道理ありて、七の
 所業誰憎まぬ者なれば、酒呑で居ても彼奴娘の血を吮うて居るわと蔭言され、流石の
 奸物も此処面白からず、荒屋一トつ遺して米塩買懸りの云訳を家主亀屋に迷
 惑がらせ何処ともなく去りける。珠運も思い掛なく色々の始末に七日余り逗留して、
 馴染につけ亭主頼もしく、お辰可愛く、囲炉裏の傍に極楽国、迦陵頻伽の笑声睦
 じければ客あしらいされざるも却て気楽に、鯛は無とも玉味噌の豆腐汁、心協う同志安ら
 かに団坐して食う甘さ、或は山茶も一時の出花に、長き夜の徒然を慰めて囲い栗の、
 皮剥てやる一顆のなさけ、嬉気に賞翫しながら彼も剥きたるを我に呉るゝおかしさ。

實げに山里も人情あたたかの暖さありてこそ住すめば都に劣らざれ。さりながら指折り数うれば最早もはや幾日
 か過すぎぬ、奈良という事臆おそい起しては空むなしく遊び居おるべきにあらずとある日支度整え勘定促
 し立たちいで出んというに亭主ていしゅあき呆あきれて、是これは是は、婚礼も済すまぬに。ハテ誰が婚礼。知れた事お
 辰あきたまが。誰と。冗談は置おきたま玉え。あなたならで誰と、云いわれてカツと赤面し、乾きたる舌早く、
 御亭主こそ冗談は置おきたま玉え、私約束したる覚おぼえなし。イヤ怪けしからぬ野暮やぼを云いわるゝは都の御
 方かたにも似ぬ、今時の若わかいもの者ものがそれではならぬ、さりとは百兩投なげだし出いて七蔵にグツとも
 云いわせなかつた捌さばき方と違ちがつておぼこな事、それは誰しも耻はずかしければ其その様にまぎらす
 者なれど、何も紛まぎすにも及まばず、爺じいが身に覺あつてチャンと心得てあなたの思わく凶星の
 外れぬ様致せばおとなしく御待おまちなされと何やら独ひとり呑のみ込こみの様子、合点がてんならねば、是これ是これ
 御亭主、勘違い致さるゝな、お辰様をいとしいところ思いたれ女房に為し様なぞとは一いち厘りん
 も思わず、忍びかねて難義たすけを助たすける計はかりの事、旅の者に女房授けられては甚はなだ迷惑めいわく。ハハハ
 へア、何の迷惑、器量美しく学問おんぎよく音おん曲きょくのたしなみ無なくとも縫ぬい針はり暗くらからず、女の道自然
 と弁わえておとなしく、殿御とのごを大事にする事請うけあい合あいのお辰を迷惑とは、両ふた柱はしらの御神みかみ以来
 凶ずない議論、それは表面うわべ、真まことを云えば御前の所しよぎよう行いも曰いわくあつてと察したは年の功、チ
 ャン鬚まげを付つけて居すても粹すいじや、實まことはおれもお前のお辰に惚ほれたも善よく惚ほれた、お辰が御前に惚ほれた

も善く惚たと当世の惚様の上手なに感心して居るから、媼とも相談して支度出来次第婚
 礼さする積じや、コレ珠運年寄の云う事と牛の鞞外れそうで外れぬ者じや、お辰を女房に
 もつてから奈良へでも京へでも連立て行きやれ、おれも昔は脇差に好をして、媼も鏡
 を懐中してあるいた頃、一世一代の贅沢に義仲寺をかけて六条様参り一所にしたが、
 旅ほど鼻が可愛うておもしろい事はないぞ、いまだに其頃を夢に見て後での話しに、此
 間も媼に真夜中頃入歯を飛出さして笑つたぞ、コレ珠運、オイ是は仕たり、孫でも無かつ
 たにと罪のなき笑い顔して奇麗なる天窓つるりとなでし。

中 実生二葉は土塊を抽く

我今まで恋と云う事為たる覚なし。勢州四日市にて見たる美人三日眼前にちらつき
 たるが其は額に黒痣ありてその位置に白毫を付なばと考えしなり。東京天王寺にて
 菊の花片手に墓参りせし艶女、一週間思い詰しが是も其指つきを吉祥菓持せ玉う鬼子
 母神に写してはと工夫せしなり。お辰を愛しは修業の足しにとにはあらざれど、之を妻に
 妾に情婦になどせんと思いしにはあらず、強いて云わば唯何となく愛し勢に乗りて百兩は

与あたえしのみ、潔白わがの我心中はかを忤はかる事出来ぬ爺じいめが要いらざる粹すい立馬鹿だてばか々々し、一生いっしに一つ珠しゅう運んが作意さくの新仏しん体を刻くまんとする程ほどの願望のぞある身の、何なにとして今いまから妻つまなど持もつべき、殊ことにお辰おちは叔父おじさえなくば大だい尽じんにも望のぞまれて有ゆう福ふくに世よを送おくるべし、人ひとは人ひと、我われは我われの思しわくありと決けつ定じようし、置手紙てがみにお辰おち宛あてて少すこ許しばかりの恩おんを伽かせに御身おんみを娶めとらんなどする賤いやしき心こころは露持つゆたぬ由よしを認したた、跡あとは野のとなれ山路さんじゆにかゝりてテクあるき歩行あるき。さても変物へんぶつ、此男この男木作きさくりかど譏そしる者は肉にく団奴だんごさい才さい、御釈迦おしやくさま様が女房にようばう捨て山やま籠こもりせられしは、耆婆きばもヒを投なげた癩らい病びよう、接吻くちづけの唇くちびるポロリと落おちしに愛想あいそう尽つしてならんなど疑やう儕輩せいばいなるべし、あゝら尊そんし、尊そんし、銀ぎんの猫捨ねこすてた所ところが西さい行ぎやうなりと喜よろこんで誉ほむる輩ともも却かえつて雪ゆきのふる日の寒さむいのに氣きが付つかぬ詮義せんぎならん。人間にんげん元もとより変へんな者もの、目盲めくらてから其その昔むかし拜まがんだ旭日あさひの美うつくしきを悟さとり、巴里パリに住すんでから沢庵たくあんの味あじを知るよし。珠運しゆんは立鳥たつとりの跡あとふりむかず、一里いちりあるいた頃ころ不ふ図ず思しい出でし、二里にりあるいた頃ころ珠運しゆん様さまと呼よぶ声こゑ、まさしく其その人ひとと後見あとみれば何なにもなし、三里さんりあるいた頃ころ、もしえと袂たもと取る様子ようす、慥たしかにお辰おちと見みれば又また人も居いらず、四里しりあるき、五里ごり六里ろくり行き、段々だんだん遠とほくなるに連つれて迷まよう事こと多く、遂ついには其その顔かほ見みたくなりて寧いっせ帰かへろうかと一ひト足あし後あとへ、ドッコイと一二町いちにちよう進すすむ内うち、むかゝと其その声こゑ聞き度たくて身体からだの向むきを思おもわずくると易かゆる途端みちばた道みち傍ばたの石地蔵いしぢゆうを見て奈良ならよく誤あやつたりと一町いちちようたらずあるく向むかうより来きる夫婦連ふうふづれの、

何事か面白相に語らい行くに我もお辰と会話仕度なつて心なく一間許り戻りしを、愚なりと悟つて半町歩めば我しらず迷に三間もどり、十足あるけば四足戻りて、果は片足進みて片足戻る程のおかしさ、自分ながら訳も分らず、名物栗の強飯売家の牀几に腰打掛てまずくと案じ始めけるが、箒木は山の中にも胸の中にも、有無分明に定まらず、此処言文一致家に頼みたし。

下 若木三寸で螻蟻に害う

世の中に病ちよう者なかりせば男心のやさしかるまじ。髭先のはねあがりたる当世才子、高慢の鼻をつまみ眼鏡ゆゝしく、父母干渉の弊害を説まくりて御異見の口に封蠟付玉いしを一日粗造のブランディに腸加答見起して閉口頓首の折柄、昔風の思い付、氣に入らぬか知らぬが片栗湯こしらえた、食て見る気はないかと厚き介抱有難く、へこたれたる腹にお母の愛情を呑で知り、是より三十銭の安西洋料理食う時もケーク丈はポツケツトに入れて土産となす様になる者ぞ、ゆめく美妙なる天の配剤に不足云うべからずと或人仰せられしは尤なりけり。珠運馬籠に寒あたりして熱となり旅路の心細く二日

計り苦む所へ吉兵衛とお辰尋ね来り様々の骨折り、病のよき汐を見計らいて駕籠安泰に亀
屋へ引取り、夜の間も寐ずに美人の看病、藪医者の薬も瑠璃光薬師より尊き善女の手
持たせ玉える茶碗にて吞まざるれば何利ざるべき、追々快方に赴き、初めてお辰は我
身の為にあらゆる神々に色々の禁物までして平癒せしめ玉えと禱りし事まで知りて涙湧
く程嬉しく、一ト月あまりに衰こそしたれ、床を離れて其祝義済みし後、珠運思い切つ
てお辰の手を取り一間の中に入り何事をか長らく語らいけん、出る時女の耳の根紅かりし。
其翌日男真面目に媒妁を頼めば吉兵衛笑つて牛の鞅と老人の云う事どうじゃ〜と云
さして、元より其支度大方は出来たり、善は急いで今宵にすべし、不思議の因縁でおれの
養女分にして嫁入すればおれも一トつの善い功德をする事ぞとホク〜喜び、忽ち下女
男に、ソレ膳を出せ椀を出せ、アノ銚子を出せ、なんだ貴様は蝶の折り様を知らぬかと
甥子まで叱り飛ばして騒ぐは田舎氣質の義に進む所なり、かゝる中へ一人の男来りてお辰様
にと手紙を渡すを見ると齋くお辰あわただしく其男に連立て一寸と出しが其まゝもどら
ず、晩方になりて時刻も来るに吉兵衛焦躁て八方を駈廻り探索すれば同業の方に止り居
し若き男と共に立去りしよし。牛の鞅爰に外れてモウともギユウとも云うべき言葉なく、
何と珠運に云い訳せん、さりとて猥褻なる行はお辰に限りて無りし者をと蜘蛛手に思い屈す

する時、先程の男来りて再渡す包物、開て見れば、一筆啓上仕候未だ御意を得ず候え共
 お辰様身の上につき御厚情相掛られし事承り及びあり難く奉存候さて今日
 貴殿御計にてお辰婚姻取結ばせられ候由驚入申候仔細之あり御辰様儀婚姻には
 私方故障御座故従来の御礼旁罷り出て相止申べくとも存候え共如何にも場合切迫致
 し居り且はお辰様心底によりては私一存にも参り難候様の義に至り候ては迷惑に付甚だ唐
 突不敬なれども実はお辰様を賺し申し此婚姻相延申候よう決行致し候尚又近日参上仕り
 入り込たる御話し委細申上べく心得に候え共差当り先日七蔵に渡され候金百円及び御
 札の印までに金百円進上しおき候間御受納下され度候不悉 亀屋吉兵衛様へ岩沼子爵家従
 田原榮作とありて末書に珠運様とやらにも此旨御鶴声相伝られたく候と筆を止
 めたるに加えて二百円何だ紙なり。

第七
如是報

我は飛來ぬ他化自在天宮に

オ、お辰かと抱き付かれたる御方、見れば髯うるわしく面清く衣裳立派なる人。ハテ何処にてか会いたる様なと思ひながら身を縮まして、恐々振り仰ぐ顔に落来る其人の涙の熱さ、骨に徹して、ア、五日前一生の晴の化粧と鏡に向うた折会うたる我に少しも違わず扱は父様かと早く悟りてする少女の利発さ、是にも室香が名残の風情忍ばれて心強き子爵も、二十年のむかし、御機嫌よろしゅうと言葉後力なく送られし時、跡ふりむきて今一言交したかりしを邪見に唇嚙切て女々しからぬ風誰為にか粧い、急がでもよき足わざと早めながら、後見られぬ眼を恨みし別離の様まで胸に浮びて切なく、娘、ゆるしてくれ、今までそなたに苦勞させたは我誤り、もう是からは花も売せぬ、檻樓も着せぬ、荒

き風を其その身体にもあてさせぬ、定めしおれの所業しわざをば不審もして居たろうがまあ聞け、手
 前の母に別れてから二三日の間実は張り詰た心も恋には緩ゆるんで、夜深よふかに一人月を詠ながめては
 人しらぬ露せま窄そでき袖にあまる陣頭さびの淋さびしさ、又は総軍の鹿島立かしまだちに馬蹄ばていの音高く朝霧あさぎりを蹴け
 つて勇ましく進むにも刀の鑑引こしひかるゝように心たゆたいしが、一封の手簡書てがみく間もなきいそ
 がしき中、次第しだいに去る者の疎うとくなりしも情じょう合あひの薄うすいからではなし、軍事の烈はげしさ江戸
 に乗り込んで足溜あしだまりもせず、奥州おうしゅうまで直押ひたおしに推す程いきおいの勢いきおい、自然えんと焰しよく硝しよくの煙けむり
なれ馴なれては白粉おしろいの薫かおり思いい出いさず喇叭らうぱの響ひびに夢を破やぶれば吾妹子わがもこが寝ねくれた髪かみの婀娜あだめくも眼め
さき前まへにちらつく暇いとまなく、恋も命も共に忘れて敗軍の無念むねんには励はげみ、凱歌かちどきの鋭気えいには乗のじ、
あけ明あけても暮くれても肘ひじを擦さすり肝きもを焦こがし、饑うえては敵の肉にくに食くらひ、渴かわしては敵の血ちを飲のまんとする
しゆらまで修羅しゆらの巷ちまたに阿修羅あしゆらとなつて働はたらけば、功名こうめい一ひとつあらわれ二ツあらわれて総督おんおほの御覚おんおぼ
えめえめでたく追おひおひの出世しゆせ、一方の指揮しとなれば其任愈いよ重おもく、必死ひつしに勤こめけるが仕合しあ合あせたま
 をも受けず皆々がいじん凱陣がいじんの暁あけぼの、其方そのほう器量きりやう学問がくもん見所けんじよあり、何なに某がし大使たいしに従したがつて外国がいこくに行いき何
 々の制度せいど能よく々よく取調とくぢようべ帰朝きせうせば重おもく挙用あがりらるべしとの事、室香むろかに約束たがは違ちがえど大丈夫たが夫う青雲せいゆん
このときの志こころ此この時とき伸のべしと殊ことに血氣ちいきの雀躍こおどりして喜び、米国まいこくより欧州おしやうに前後ぜんご七年しちねんの長逗留ながとまり、
 ア、今頃いまごろは如何いかにして居ゐるか、生なれた子は女めか、男おとこか、知らぬ顔かほに、知られぬ顔かほ、早はやく

頬摺ほおすりして膝ひざの上に乗せ取り、護謨ゴム人形空気鉄砲珍らしき手玩具おもちゃ数々の家苞いえづとに遣つて、
 喜ぶ様子見たき者と足をつま立て三階四階の高楼たかどのより日本の方角いたず徒らに眺ながめしも度々なり
 しが、岩沼いわぬまきよ卿よばと呼せらるる尊たつとき御身おんかた分の御方、是も御用にて欧州に御滞在中、数なら
 ぬ我を見たて御子おんこなき家の跡目に坐すわれとのあり難き仰せ、再三いみな辞いなみたれど許されねば辞兼
 て承知し、共々うれ嬉うれしく帰朝して我は軽かろからぬ役を拜命する計ばかりか、終ついに姓を冒して人に尊ま
 るゝに付てもそなたが母の室香が情何忘るべき、家来に吩いいつけ附て段々ただ糺せば、果敢はかなや我
 と樂たのしみは分けて、彼岸かのきしの人と聞くつらさ、何年の苦勞一トつは国の為なれど、一トつは色
 紙きしのあたつた小袖こそで着て、塗ぬりの剥はげた大小おほきした見所もなき我を思い込んで女の捨すて難がたき外見みえ
 を捨て、譏そしりを関かまわず危あやうきを厭いとわず、世を忍ぶ身を隠かく匿まいれたる志、七生忘れられず、官
 軍はばせんに馳参はせんと、決心した我すら曇り声に云い出せし時も、愛情の涙は臉まぶたに溢あふれながら義
 理ことばの詞正かねしく、予かの御本望わたくし妾うれしめまで嬉うれしう存じますと、無理な笑顔えがも道理なれ明日知らぬ
 命いのちの男、それを尚なおも大事にして余りに御髪おんかみのと髻ひげ月さか代か人手にさせず、後うしろに廻まわりて元結もとゆい
 もメ力しめなき悲しさを奥歯かに噛かんできりくくと見苦にくしからず結むすうて呉くれたる計ばかりか、おのが頭かしら
 にさしたる金簪きんかんざしまで引抜き温ぬくみを添そえて売つてのみ、我身のまわり調度たにして玉たまわり
 し大事のく女房に満足させて、昔の憂うきを樂たのしみに語りたさの為ためなりしに、情なさけ無なくも死な

れては、花園はなぞのに牡丹ぼたん広々と麗うるわしき眺望ながめも、細口こもの花はな瓶びんに唯ただ二三輪りんの菊きく古流こりゅうしおらしく彼
 が生いたるを賞ほめ、賞ほめられて二人ふたりの微笑ほほえみ四畳半よじやうはんに籠こもりし時程ときほどは、今いまつくねんと影法師かげ法師相手あひま
ひとりに独ひとり見る事ことの面白おもしろからず、榮華えいげを誰たれと共に、世よも是こゝろ迄までと思おもい切きつて後妻のちさいを貰もらいもせず、
 さるにても其子こ何処どこぞと種々さまざま尋ねたれど漸ようやくそなたを里さとに取りたる事ことある姫ひめより、信濃しなの
 の方かたへ行いかれたといいう噂うわさなりしと聞き出したる計ばかり、其筋そのすぢの人に頼たのんでも何故なにゆゑか分わらず、
わねか我外わがほかに子こなければ年とし老おいる丈だけ愈い愈いしく信州しんしゅうにのみ三人さんにんも家け従いをやつて捜さがさせたるに、辛から
 くも田原たはらが探い出して七しち歳ざうといいう悪者あくものよりそなた貫もらい受うけんとしたるに、如何どういいう訳わけか
 邪魔じま入いりて間まもなくそなたは珠しゅう運うんとか云いう詰つまらぬ男おとこに、身みを救すくわれたる義理ぎりづくやら亀屋かめや
 の亭主ていしゅの圧制あつせいやら、急いそに婚い礼れいするといいうに、一いつ旦たん歸京かえつて二度目にどめにまた丁ちやう度ど行いき着つたる
 田原たはらが聞きて狼ろう狽ばいし、吾書わが捨かきて室香むろかに紀念かたみと遺のこせし歌うた、多分たぶんそなたが知して居いるならんと
 手紙てがみの末すえに書かき頓智とんちに釣つり出いだ、それから無理むりに訳わけも聞きかせず此こゝ処こまで連つれて来きたなれば定さだ
 めし驚おどいたでもあろうが少しも恐おそるゝ事ことはなし、亀屋かめやの方は又々またまた田原たはらをやつて始末しまつする程ほど
 に是こゝからは岩沼いわぬま子爵ししやくの立派たてがみな娘むすめ、行儀ぎやうぎ学問がくもんも追々おそ覚えさして天あつ晴はれの婿むこ取り、初はつ孫まごの顔かほ
 でも見たら夢ゆめの中うちにそなたの母ははに逢あつても云い訳わけがあるあると今いまからもう嬉うれしくてならぬ、それ
 にしても髪かみとりあげさせ、衣い裳しやう着きかゆさすれば、先刻さつき内々戸うちうちの透すきから見たみたとは違ちがつて、

是程までに美しいそなたを、今まで木綿布子着せて置た親の耻しさ、小間物屋も呼せられたら追付来であろう、櫛簪何なりと好なのを取れ、着物も越後屋に望次第云付さずするか遠慮なくお霜を使え、あれはそなたの腰元だから先刻の様に丁寧に辞義なんぞせずとよい、芝屋や名所も追々に見せましょ。舞踏会や音楽会へも少し都風が分つて来たら連て行ましょ。書物は読るかえ、消息往来庭訓までは習ったか、ア、嬉しいぞ好々、学問も良い師匠を付てさせようと、慈愛は尽ぬ長物語り、扱こそ珠連が望み通り、此女菩薩果報めでたくなり玉いしが、さりとは結構づくめ、是は何とした者。

第八 如是力によぜりき

上 楞嚴呪文の功も見えぬ愛慾あいよく

古風作者こふうざくしやの書かきそうな話し、味噌越みそこし提げて買物あるきせしあのお辰たつが雲の上うえびと人岩沼いわぬま
 子爵ししやくさま様の愛まなむすめ娘きいと聞て吉兵衛仰天きんべいおうえんし、扱さてこそ神も仏も御座る世じや、因果いんぐわ覲てきめん面地めんぢな
 らしのよい所に蘿蔔だいごは太りて、身持みもちのよい者に運いうことの實じつがなる程理かたつに叶かなつた幸福しあふと無上むじやうに有難ありがた
 がり嬉うれしがり、一も二もなく田原たはらの云事いうこと承知じやうちして、おのが勧めて婚姻けんこんさし懸かけたは忘れた
 ように何とも云わず物思ものおもわしげなる珠運しゅうんの腹聞はらきかずとも知れてると万端ばんたん埒らち明あけ、貧女ひんにょを令たま
 嬢ぢやうといわるゝように取とり計はからいたる後、先日せんじつの百兩ひゃくらう突つ戻もどして、吾当われ世の道理しりは知しねど此こ
のよう様な氣きに入いらぬ金受取かねうとる事こと大嫌だいきらなり、珠運しゅうん様への百兩ひゃくらうは慥たしかに返かへしたれど其人そのひとに礼れい
 もせぬ子爵ししやくさまから此親爺このおやじが大枚たいまいの礼貫れいくわんは煎豆いりまめをまばらの齒はで喰くえと云わるゝより有難迷ありがた

惑、御返し申ますと率直に云えば、否それは悪い合点、一酷にそう云われずと子爵からの御志、是非御取置下され、珠運様には別に御礼を申ますが姿の見えぬは御立なされたか、十二奥の坐敷に。左様なら一寸と革囊さげて行かれば亭主案内するを堅く無用と止めながら御免なされと唐襖開きて初対面の挨拶了りお辰素性のあらまし岩沼子爵の昔今を語り、先頃よりの礼厚く演て子爵より礼の餽り物数々、金子二百円、代筆ならぬ謝状、お辰が手紙を置列べてひたすら低頭平身すれば珠運少しむつとなり、文丈ケ受取りて其他には手も付ず、先日百両まで其処に投出し顔しかめて。御持帰り下さい、面白からぬ御所置、珠運の為た事を利を取ろう為の商法と思われてか片腹痛し、些許の尽力したるも岩沼令嬢の為にはあらず、お辰いとしと思うてばかりの事、夫より段々馴染につけ、縁あればこそ力にもなりなられて互に嬉敷心底打明け荷物の多きさえ厭う旅路の空に婚礼までして女房に持とうという間際になりて突然に引攫い人の恋を夢にし、て貌に食せよという様な情なきなされ方、是はまあどうした訳と二三日は気抜する程恨めしくは存じたれど、只今承れば御親子の間柄、大切の娘御を私風情の賤き者に嫁入してはと御家従のあなたが御心配なすつて連て行れたも御道理、決して私めが僭上に岩沼子爵の御令嬢をどうのこうのとは申ませぬから、金円品物は吃度御持帰り下され、併し

まぎく〜と夫婦約束までしたあの花漬売はなづけうりは、心さえ変らねばどうしても女房に持つ覚悟、
 十二月に御嶽おんたけの雪は消ゆる事もあれ此この念おもいは消きえ、ア、否いやなのは岩沼令嬢、恋しいは
 花漬売と果はては取とり乱みだして男の述じゆつかい懐こころ。爰こゝぞ肝要、御主人の仰うけせ受うて来た所なり。よしや
 此すわ恋うみ諏訪すわの湖うみの氷より堅くとも春風のぼやく〜と説きやわらげ、凝りたる思おもいを水みづに流さし、
 後々の故障なき様にせではと田原は笑顔えがあやしく作り上うわくちびるしほなめ唇くちびる屢しばしば嘗なめながら、それは一々至
 極の御道理、さりとして人間を二つにする事も出来ず、お辰様またが再度花漬売なにならるゝ瀬も
 無なるべければ、詰りあなたおのぞみの無理な御望いのちと云いう者もの、あなたも否いやなのは岩沼令嬢と仰うせら
 れて見ると、まさか推して子爵の婿むこになろうとの思おぼしめしめし召よでも御座るまいが、夫婦約束ま
 でなさつたとて婚礼すみの済すたるでもなし、お辰様も今の所ではあなたを恋しがって居らるゝ
 様子なれど、思想なまの発達なませぬ生なま若なまい者の感情、追おつ付つけ變かつて来るには相違ないと殿様の仰
 せ、行末は似つかわしい御縁おんえんを求めて何いれかの貴族わがの若わか公ぎみを納いれらるゝ御積おんり、是これも人の
 親おんの心こゝろになつて御おかん考がえなされて見たら無理むりでは無いと利発りのあなたにはよく御了解おんで御
 座まりましよう、箇か様よう申ませばあなたとお辰あ様の情あ交いを割わく様ようにも聞きえましようが、花漬売
 としてこそあなたも約束よそをなされたれ、詰おる所成就お覚ぼ東つなき因縁いんえん、男おらしゆう思おもい切きら
 れたが双そ方ほうの御お為ためかと存ぞんじます、併しかしお辰あ様には大恩おあるあなたを子爵しも何なにでおろそか

に思われましよう、されば是等の餽物親御からなさるゝは至当の事、受取らぬと仰つたとして此儘にはならず、どうか条理の立様御分別なされて、枉ても枉ても、御受納と舌小賢しく云述に東京へ帰つたやら、其後音沙汰なし。さても浮世や、猛き虎も樹の上の猿には侮られて位置の懸隔を恨むらん、吾肩書に官爵あらば、あの田原の額に畳の跡深々と付さし、恐惶謹言させて子爵には一目置た挨拶させ差詰智殿と大切がられべきを、四民同等の今日とて地下と雲上の等差口惜し、珠運を易く見積つて何百円にもあれ何万円にもあれ札で唇にかすがい膏打ような処置、遺恨千万、さりながら正四位何の某とあつて仏師彫刻師を賀には為たがらぬも無理ならぬ人情、是非もなければど抑々仏師は光孝天皇是忠の親王等の系に出て定朝初めて綱位を受け、中々賤まるべき者にあらず、西洋にては声なき詩の色あるを絵と云い、景なき絵の魂凝しを彫像と云う程尊む技を為す吾、ミチエルアンジロにもやはか劣るべき、仮令令嬢の夫たるも何の不都合あるべきとは云え、蝸牛の角立て何の益なし、残念や無念やと癩癩の牙は噛めども食付所なければ、尚一段の憤悶を増して、果は腑甲斐なき此身惜からずエ、木曾川の逆巻水に命を洗つてお辰見ざりし前に生れかわりたしと血相変る夜半もありし。

下 化城論品の諫も聴ぬ 執着

瘦たりやく、病氣揚句を恋に責られ、悲に絞られて、此身細々と心引立ず、浮藻足
 をからむ泥沼の深水にはまり、又は露多き苔道をあゆむに山蛭ひいやりと襟に落る
 など怪しき夢計見て覺際胸あしく、日の光さえ此頃は薄うなつたかと疑うまで天地を
 我につれなき者の様恨む珠運、旅路にかりそめの長居、最早三月近くなるにも心付ねば、
 まして奈良へと日課十里の行脚どころか家内をあるく勇氣さえなく、昼は転寝勝に時
 々怪しからぬ囁語しながら、人の顔見ては戯談一トつ云わず、にやりともせず、世は
 漸く春めきて青空を渡る風長閑に、樹々の梢雪の衣脱ぎ捨て、家々の垂氷いつの間にか失
 せ、軒伝う雫絶間なく白い者班に消えて、南向の藁屋根は去年の顔を今年初めて露せ
 ば、霞む眼の老も、やれ懐かしかったと喜び、水は温み下草は萌えた、鷹はまだ出ぬか、
 雉子はどうかと、終に若鮎の噂にまで先走りて若い者は駒と共に元氣付て来る中に、さ
 りとてはあるまじき鬱ぎ様。此跡ががらりと早変りして、さてもく和御寮は踊る振が見
 たいか、踊る振が見たくば、木曾路に御座れのなど狂乱の大陽氣にでも成れまい者でも

なしと亀屋の爺心配し、泣くな泣きやるな浮世は車、大八の片輪田の中に踏込んだ様にじ
 つとして、くよくよして居るよりは外をあるいて見たら又どんな女に廻り合かもしれぬ、
 目印の柳の下で平常魚は釣れぬ代り、思いよらぬ蛤の吸物から真珠を拾い出すと云う諺が
 あるわ、腹を広く持て、コレ若いの、恋は他にもある者を、と詞おかしく、元頭の脳
 漿から天保度の浮気論主意書という所を引抽き、黴の生た駄洒落を熨斗に添て度々
 進呈すれど少しも取り容れず、随分面白く異見を饒舌つても、却つて珠運が溜息の合の
 手の如くなり、是では行かぬと本調子整々堂々、真面目に理屈しんなり諄々と説諭すれ
 ば、不思議やさしも温順き人、何にじれてか大薩摩ばりばりと語気烈しく、要らざる
 御心配無用なりうるさしと一トまくりにやりつけられ敗走せしが、関わず置ば当世時花ら
 ぬ恋の病になるは必定、如何にかして助けてやりたいが、ハテ難物じや、それとも寧、経
 帷子で吾家を出立するようにならぬ内追払おうか、さりとては忍び難し、なま
 じお辰と婚姻を勧めなかつたら兎も角も、我口から事仕出した上は我分別で結局を付ね
 ば吉兵衛も男ならずと工夫したるはめでたき氣象ぞかし。年は老るべきもの流石古
 兵の斥候虚実の見所誤らず畢竟手に仕業なければこそ余計な心が働きて苦む者なる
 べしと考えつき、或日珠運に向つて、此日本一果報男め、聞玉え我昨夜の夢に、金

襖ま立派なる御殿の中、眼めもあやなる美いしき衣裳しよう着たる御姫様床の間に向つて何やらせ
 らるゝ其鬢そのびんつき付襟えりあし足あしのしおらしき、後うしろからかぶりついてやりたき程、もう二十年若くば
 唯ただは置ぬ品物めと腰は曲つても色に忍び足、そろ／＼と伺いより椽側えんがわに片手つきてそつ
 と横顔拜めば、驚おどろたりお辰、花漬売に百倍の奇麗をなして、殊更憂うれいを含む工合凄味あるに
 総毛立そうけだちながら尚能くそこら見廻せば、床に掛かけられたる一軸誰たれあろうおまえの姿絵故少ゆえし
 妬ねたくなつて一念の無明萌むみす途端、椽の下から頭あれ出たる八百八狐付添おれて己の踵かかとを
 覗ねらうから、此奴こやつたまらぬと逃にげだす後から諏訪すわ法性の胃かぶだか、粟八升も入る紙袋かんぶくろだか
 をスポリと被かせられ、方角さらに分らねば頻しきりと眼玉を澆ばち々したらば、夜具の袖そでに首を突つ
 込んで居たりけりさ、今の世の勝頼かつよりさま、チト御驕おおごりなされ、アハ、と笑い転ころげて其そ
 儘坐敷のままざしきをすべり出いで、跡は却かえつて弥寂いやしむしく、今の話にいとゞ恋こしさまさりて、其事彼そのことか
 事寂ことじやく然ぜんと柱むらに憑もたれながら思ううち、瞼まぶた自然とふさぐ時あり／＼とお辰の姿、やれま
 てと手を伸のばして裙すそ捉とらえんとするを、果敢はかなや、幻まぼの空そらに消えて遺のこるは恨うらみ許かり、爰こゝにせめて
 は其面影おもかげ現まに止とどめんと思おもいたち、亀屋かめやの亭てい主しゆに心添そえられたるとは知らで自善みずか事考きこえ
 出いだせし様ように吉兵衛きちべゑに相談すれば、さて無理ならぬ望のぞみ、閑静ひとまほなる一間欲ほしとならばお辰住す
 居まいたる家尚能なおよらん、畳たたみさえ敷けば細工部屋せいざいにして精々せいざい一ト月位住すまうには不足みなかるべし、

ナ二話に来るは謝絶ことわると云わるゝか、それも承知まかなしました、それならば食事を賄まかなうより外に人を通わせぬよう致しますか、然しかし余り牢住居ろうすまいの様ではないか、ム、勝手とならば仕方がない、新聞丈だけは節々せつせつあげ上ましよう、ハテ要いらぬとは悪い合点がてん、気の尽つきた折は是非世間の面白可笑おかしいありさまを見るがよいと、万事親切に世話して、珠連たまづなが笑えまし気に恋人すずみの住し跡に移るを満足せしが、困りしは立像刻む程の大きな良木よきなく百方索さかしたれど見当らねば厚ひのきき檜のきの大きな古板を与えぬ。

第九 如是果

上 既に仏体を作りて未得安心

勇 猛 精進 齋 怠らず、南無 歸命 頂礼 と真心を凝し 肝胆を碎きて 三 拝 一 鑿 九 拝 一 刀、刻み出せし木像あり難や 三十二 相 円 満 の 当 体 即 仏、御利益 疑 なしと 腥 け 和 尚 様 語 られしが、さりとは浅い 詮 索、優 鈿 大 王 とか 饅 飴 大 王 とやらに頼まれての 仕事、仏師もやり損じては大変と額に汗流れ、眼中に木片の飛込も構わず、恐れ惶みてこそ作りたれ、恭敬 三 昧 の 嬉 ぎ 者 ならぬは、御本尊様の前の 朝 暮 の 看 経 には 草 臥 を 啣 たらながら、大黒の傍に下らぬ 雑 談 には夜の更るをも厭い玉わざるにても知るべしと、評せしは両親を寺参りさせおき、鬼の留守に洗濯する命じや、石 鹼 玉 泡 沫 夢 幻 の世に樂を為では損と帳場の金を攫み出して御齒涅溝の水と流す息子なりしとかや。珠

運は段々と平^{ひらいた}面^{めん}板^{ばん}に彫^{ほりうか}浮^{うか}べるお辰^{たつ}の像^{ざう}、元より誰^{たれ}に頼^{たの}まれしにもあらねば細^こ工^{こう}料^{りょう}取^とら
 んともあらず、唯^{ただ}恋^こしさに余^ありての業^{わざ}、一^い刀^{とう}削^{けずり}ては暫^{しばら}く茫^{ぼう}然^{ぜん}と眼^めを瞑^{ふさ}げば花^{はな}漬^{つけ}め
 せと矯^{きようおん}音^{おん}を洩^{もら}す口^{くち}元^{げん}の愛^{あい}らしき工^く合^{あひ}、オ、それくと影^{かげ}を促^{とら}えて再^{また}一^{ひと}刀^{とう}、一^{ひと}鑿^の突^つ
 いては跡^{あと}ずさりして眺^{なが}めながら、幾^{いく}日^{にち}の恩^{おん}愛^{あい}扶^{たす}けられたり扶^{たす}けたり、熱^{あつ}に汗^{あせ}蒸^{たぎ}れ垢^{あか}臭^{くさ}き身^か
 体^{からだ}を嫌^{いや}な様子^{ようす}なく柔^{やさ}しき手^てして介^{くわい}抱^くし呉^{くれ}たる嬉^{うれ}しさ今は風^{かぜ}前^{まへ}の雲^{うみ}と消^くえて、思^{おも}は徒^{いた}ら都^と
 空^{そら}に馳^はする事^{こと}悲^{かな}しく、なまじ最初^{さいしょ}お辰^{たつ}の難^{がた}を助^{たす}けて此^{この}家^{いえ}を出^でし其^{その}折^{おり}、留^{とど}められたる袖^{そで}
 思^きい切^{きつ}て振^ふ払いしならばかくまでの切^きなる苦^{くる}とはなるまじき者^{もの}をと、恋^こしを恨^{うら}む恋^この愚^ぐ痴^ち
 吾^{われ}から吾^{われ}を弁^わえ難^{がた}く、恍^{うつ}惚^ととする所^{ところ}へ著^あるゝお辰^{たつ}の姿^{すがた}、眉^{まゆ}付^つ媚^{まめ}かしく生^{いき}々^{いき}として晴^ひ
 何^じの情^{じやう}を含^こみてか吾^わ与^{あた}えし櫛^{くし}にジツと見^みとれ居^ゐる美^うしさ、ア、此^{この}処^{ところ}なりと幻^{まぼろ}像^{ざう}を写^かして
 再^{また}一^{ひと}鑿^の、漸^まく二十^{にじゅう}日^{にち}を越^こえて最初^{さいしょ}の意^い匠^{じやう}誤^ごらず、花^{はな}漬^{つけ}売^うの時^{とき}の檻^{つづ}籠^{ろう}をも著^き
 の錦^{にしん}をも着^きせず、梅^う桃^{たう}桜^{おう}菊^{きく}色^{しき}々の花^{はな}綴^{つづ}り衣^い麗^{れい}しく引^ひ纏^{まと}せたる全^{ぜん}身^{しん}像^{ざう}惚^ほれた眼^めからは観^く
 音^{おん}の化^け身^{しん}かとも見^みれば誰^{たれ}に遠^と慮^りなく後^ご光^{こう}輪^{りん}まで付^つけ、天^{てん}女^{にょ}の如^{ごと}く見^み事^じに出来^{でき}上^あり、吾^{われ}なが
 ら満^{まん}足^{そく}して眷^ほれぼれとながめ暮^くせしが、其^{その}夜^よの夢^{ゆめ}に逢^{おう}瀬^せ平^{へい}常^{じやう}より嬉^{うれ}しく、胸^{むね}あり丈^たケの口^{くち}説^{せつ}
 濃^こまやか、恋^こ知^しざりし珠^{しゆ}運^{うん}を煩^{ぼん}悩^うの深^{ふか}水^{みづ}へ導^{みち}きし笑^え窪^{くぼ}憎^{にく}しと云^いえば、可^か愛^{わい}がられて喜^{よろこ}ぶは浅^あ
 し、方^か様^{たさま}に口^{くち}惜^ししい程^{ほど}憎^{にく}まれてこそ誓^{せい}文^{もん}移^{うつ}り気^きならぬ真^ま実^{じつ}を命^{いのち}打^{うち}込^こんで御^ご見^みせ申^{もう}しだけ

れ。扱は迷惑、一生可愛がつて居様と思ふ男に。アレ嘘、後先揃わぬ御言葉、どうでも殿御は口上手と、締りなく睨んで打つ真似にちよいとあぐる、織麗な手首繫りと捉て柔に握りながら。打るゝ程憎まれてこそ誓文命掛て移り気ならぬ真実をと早速の鸚鵡返し、流石は可笑しくお辰笑いかけて、身を締め声低く、此手を。離さぬが悪いか。ハイ。これはくく大きに失礼と其儘離してひざる真面目顔を、心配相に横から覗き込めば見られずまし難く其眼を邪見に蓋せんとする平手、それを握りて、離さぬが悪いかと男詞、後は協音の笑計り残る睦じき中に、娘々と子爵の鏽声。目覚れば昨宵明放した窓を掠めて飛ぶ鳥、憎や彼奴が鳴いたのかと腹立しさに振向く途端、彫像のお辰夢中には悪口も浮み来るに、今は何を着すべしとも思ひ出せず工夫錬り練り刀を礪ぎぬ。

下 堅く妄想を捏して自覚妙諦

腕を隠せし花一輪削り二輪削り、自己が意匠の飾を捨て人の天真の美を露わさんと勤めたる甲斐ありて、なまじ着せたる花衣脱するだけ面白し。終に肩のあたり頸筋のあたり、

梅も桜も此君の肉付の美しきを蔽いて誇るべき程の美しさあるべきやと截ち落し切り落
 し、むつちりとして愛らしき乳首、是を隠す菊の花、香も無き癖に小癩なりきと刀急し
 く是も取つて払い、可笑や珠運自ら為たる業をお辰の仇が為たる事の様に憎み今刻み出
 す裸体も想像の一塊なるを實在の様に思えば、愈々昨日は愚なり玉の上に泥絵具
 彩りしと何が何やら独り後悔慚愧して、聖書の中へ山水天狗楽書したる児童が日曜の
 朝字消護謨に気をあせる如く、周章狼狽一生懸命刀は手を離れず、手は刀を離さず、必
 死と成て夢我夢中、きらめく刃は金剛石の燈下に転ぶ光きら／＼截切る音は空駟る矢羽の
 風を剪る如く、一足退つて配合を見糺す時は琴の糸断えて余韻のある如く、意糾々
 氣昂々、抑も幾年の学びたる力一杯鍛いたる腕一杯の経験修鍊、渦まき起つて沸々
 と、今拳頭に迸り、倦も疲も忘れ果て、心は冴に冴渡る不乱不動の精進波羅密、骨を
 も休めず筋をも緩めず、湧くや額に玉の汗、去りも敢ざる不退転、耳に世界の音も無、腹
 に饑をも補わず自然と不愒身命の大勇猛には無礙無所畏、切屑払う熱き息、吹
 き掛け吹込む一念の誠を注ぐ眼の光り、凄まじきまで凝り詰むれば、爰に仮相の花衣、
 幻翳空華解脱して深入無際成就一切、莊嚴端麗あり難き実相美妙の風
 流 仏 仰ぎて珠運はよろ／＼と幾足うしろへ後退り、ドツカと坐して飛散りし花を捻

りつびしよ微笑せうせるを、
寸すん善ぜん尺しゃく魔まの三さん界がいは猶ゆう如に火か宅たくや。
珠しゆ運うんさま珠しゆ運うんさまと呼よび声こえ戸こ口く
にせわし。

第十 如是本末究竟等

上 迷迷迷、迷は唯識所変ゆえ凡

下碑げしよが是非御来臨おいでなされというに盗まれべき者なき破屋あばらやの気楽さ、其儘そのまま亀屋かめやへ行けば吉兵衛待兼まぢかねが顔に挨拶して奥の一間へ導き、扱珠さてしゆうん運様、あなたの逗とまり留りも既に長い事、あれ程有し雪も大抵は消て仕舞しましました、此頃このころの天氣の快よさ、旅路もさのみ苦しゅうはなし其道そのみち勉強ための為に諸国行脚あんぎやなさるゝ身で、今の時候にくすぶりて計り居らるるは損なという者、それもこれも承知せぬでは無なかうが若い人の癖とてあのお辰たつに心を奪うばわれ、然しかも取残された恨うらみはなく、その木像まで刻むと云いは恋に親切で世間に疎うとい唐土もろこしの天子様てんしやうが反魂香はんこんかう焼れた様な白痴たわけと悪口たを叩くはおまえの為を思うから、実はお辰あめに逢あわぬ昔と諦あきらめて奈良へ修業しゆぎやうに行て、天晴あつぱれ名人めいじんとなられ、仮かり初はつめながら知合しりあいとなつた爺じいの耳へ

もあなたの良評判を聞せて貰い度い、然し何もあなたを追立てる訳ではないが、昨日もチラリト窓から覗けば像も見事に出来た様子、此上長く此地に居れても詰りあなたの徳にもならずと、お辰憎くなるに付てお前可愛く、真から底から正直におまえ、ドッコイあなたの行末にも良様昨夕睨と考えて見たが、何でも詰らぬ恋を商買道具の一刀に斬て捨横道入らずに奈良へでも西洋へでも行れた方が良い、婚札なぞ勧めたは爺が一生の誤り、外に悪い事仕た覚はないが、是が罪になつて地獄の鉄札にでも書かはせぬかと、今朝も仏様に朝茶上る時懺悔しましたから、爺が勧めて爺が廃せというは麴竿握らせて殺生を禁ずる様な者で真に云憎き意見なれど、此を我慢して謝罪がてら正直にお辰めを思ひ切れと云う事、今度こそはまちがった理屈ではないが、人間は活物杓子定規の理屈で平押には行ず、人情とか何とか中々むずかしい者があつて、遠くも無い寺参して御先祖様の墓に櫛一束手向る易さより孫娘に友禅を買着る苦しい方が却て仕易いから不思議だ、損徳を算盤ではじき出したら、珠運が一身二一添作の五も六もなく出立が徳と極るであろうが、人情の秤目に懸ては、魂の分銅次第、三五が十八にもなりて揚屋酒一猪口が弗箱より重く、色には目なし無二無三、身代の釣合滅茶苦茶にする男も世に多いわ、おまえの、イヤ、あなたの迷も矢張人情、そこであなたの合

点てんの行ゆく様よう、年としの功こうという眼めがね鏡がねをかけてよくく曲くせ者ものの恋こひの正ただ体ていを見み届とた所ところを話はなしまし
 て、お辰あきめを思おもい切きせましよう。先ま第一だいに何なにを可かわ愛あがつて誰たれを慕したうのやら、調しらべて見みると
 余あま程ほどおかしな者もの、爺おやの考かんがえでは恐おそらく女おんなに溺おぼれる男おとこも男おとこに眩くらむ女おんなもなし、皆みな々々手て製せいの影かげ法師ほうし
 に惚ほれるらしい、普な通みの人の恋こひの初し幕まく、梅うめ花はなの匂におふんとしたに振ふり向むけ柳やなぎのとりなり玉たま
 の顔かほ、さても美人びじんと感かん心しんした所ところでは西さい行ぎやうも凡ぼん夫ぶも変かわりはなけれど、白こ痴けは其その女おんなの影かげを自みづか
 分わの晴はの底そこに仕し舞まい込こんで忘われず、それから因いん縁げんあれば両りやう三さん度ども落お合あいさつつ換かいさつつの一つも云いわ
 るより影いん法師ほうし殿だん段だん々々堅かくなつて、愛あい敬ぎやう詞じを執し着ちやくの耳みみの奥おくで繰くり返かえし玉たまい、尚なお
 因いん縁げん深ふかければ戯しやう談だんのやりとり親おん切ぎの受う授け男おとこは一寸いちゆん行ぎやうにも新しん著しやく百ひやく種しゆの一いつ冊さくも土み産やげ
 にやれば女おんなは、夏なつの夕ゆふ陽ひの憎にくや烈はげしくて御ご暑しよう御ご座ざりましたと、岐ぎ阜ふ団だん扇せんに風かぜを送おくり氷こおり
 水みづに手て拭ぬぐいを絞しぼり呉くれるまでになつてはあり難がたさ嬉うれしさ御ご馳ち走そうの瓜うりと共ともに甘あまい事こと胃いの腑ふに
 染しみ渡わたり、さあ堪たまらぬ影いん法師ほうし殿だんむくくと魂たま入いり、働はたらき出でし玉たま御ご容よう貌ぼうは百ひやく三さん十じゆ二に相さうも
 揃そろい御おん声こゑは鶯うぐいすに美うつく音ね錠じやう飲いんましたよりまだ清きよく、御ご心しんもじ広ひろ大だい無む暗あんに拙せつ者しやを可かわ愛あがつ
 て下くださる結むす構くわ尽つめ故ゆゑ堪たま忍しのむならずと、車くるまを横よこに押おし親おや父ちちを勘かん当たうしても女おんな房ぼうに持もつ覚さ悟ご極ごくめて
 目め出で度たぐ婚こん礼らいして見みると自みづか分のぶん妄もう像ざうほど真ほん物ものは面おも白しろからず、領えり脚あしが坊ぼう主ずで、乳ちちの下したに
 燒こ芋げの焦やうた様ようの痣あざあらわれ、然しかも紙かみ屑くず屋やとさもしき議ぎ論ろん致いたされては意い気きな声こゑも聞きたくな

く、印しるしつき付つの花はな合せあ負まても平気おおなるには寛容おおなる御心おこ却こつて迷惑ごま、どうして此この様よう
 な雌めすを配つれ偶あにしたかと後悔あするが天下お半分おの大お切きり、真実まことを云いば一尺もの尺さし度どが二尺もの
 影かげとなつて映うつる通り、自分の心こゝろといいう燈ともから、さほどにもなき女の影かげを天あま人にじやと思おもいな
 して、恋うらも恨みもあるもの、お辰とめとても其その如ごとく、おまえの心こゝろから製つくえた影法師かげ法師におまえ
 が惚ほれて居いる計はかり、お辰との像がたに後光ごこうまで付つけた所ところでは、天あつ晴はれ女に菩薩よぼさつとも信ま仰まして居いらるゝ
 か知らねど、影法師かげ法師じやゝゝ、お辰とめはそんな気き高たかく優美うゑな女にならずと、此この爺じいも今日けふ悟わ
 つて憎にくくなつた迷まうなく、爰こゝにある新聞しんぶんを讀よめ、と初はは手て丁てい寧ねい後ごは粗放そほうの詞ことばづかい、散よび
 々にこなされて。おのれ爺じいめ、えせ物もの知しの恋こゝろの講こう釈じやく、いとし女房にようばうをお辰とめお辰とめと呼よび
 捨て片かた腹痛ふくうしと睨にらみながら、其事そのことの返辞へんじはせず、昨日けふ頼たのみ置おし胡粉ごこん出来きて居いるかかと刷毛はけ
 諸もろ共ともに引ひきもぐ、ように受取うけとり、新聞しんぶん懐くわい中ちゆうして止とむるをきかず突つと立たつて置ぎわりあらく、馴な
 し破屋あばらに駈かけ戻もどりぬるが、優然うゑぜんとして長閑のどかに立たて風流ふうりゆう仏ぶつ見みるより怒いかり、何なにはさ
 ておき色いろ合程あよく飯いに塗ぬり上あげ、柱はしらにもたれ安坐あんざして暫しばく眺ながめたるこそ愚おろなれ。吉兵衛きちべゑの
こしは詞氣しきになりて開ひらく新聞しんぶん、岩沼いわぬま令嬢れいぢゆうと業なり平侯へいこう爵しやくと題だいせる所ところをふと読よ下くだせば、深山みやまの美び
 玉都門くともんに入いつてより三千ぶの砒びに顔色かほいろなからしめたる評判へうはん嘖さ々さたりし当代たうだいの佳人かじん岩沼令いわぬま
 嬢ぢゆうには幾多いくたの公子こうし豪商ごうかう熱血ねつけつを頭腦ちゆうノウに潮しほして其その一いっ顰びん一いっ笑しょうを得えんと欲ほつせしが預かねて今業平いまなりひら

と世評ある某侯爵は終に子爵の許諾を経て近々結婚せらるゝよし侯爵は英敏閑雅今業平の称空しからざる好男子なるは人の知所なれば令嬢の艶福多い哉侯爵の艶福も亦多い哉艶福万歳羨望の到に勝ず、と見るゝ面色赤くなり青くなり新聞紙引裂捨て何処ともなく打付たり。

下 恋恋恋、恋は金剛不壞なるが聖

虚言という者誰吐そめて正直は馬鹿の如く、真実は間抜の様に扱わるゝ事あさましき世ぞかし。男女の間変らじと一言交せば一生変るまじきは素よりなるを、小賢しき祈誓三昧、誠少き命毛に情は薄き墨含ませて、文句を飾り色めかす腹の中慨かわしと昔の人の云たるが、夫も牛王を血に汚し神を証人とせしはまだゆかしき所ありしに、近來は熊野を茶にして罰を恐れず、金銀を命と大切に、一金千両也右借用仕候段実正なりと本式の証文遣り置き、変心の暁は是が口を利て必ず取立らるべしと汚き小判を枷に約束を堅めけると、或書に見えしが、是も烏賊の墨で文字書き、亀の尿を印肉に仕懸るなど巧み出すより廢れて、当時は手早く女は男の公債証書を吾名にして取

り置、男は女の親を人質にして僕使うよし。亭主持なら理学士、文学士漬が利く、
 女房持たば音楽師、画工、産婆三割徳ぞ、ならば美人局、げうち、板の間持ぎ等の業出
 来て然も英仏の語に長じ、交際上手でエンゲージに詫付華族の若様のゴールの指輪一日
 に五六位、取る程の者望むような世界なれば、汝珠運能々用心して人に欺かれぬ
 様すべしと師匠教訓されしを、何の悪口など冷笑しが、なる程、我正直に過て愚なり
 し、お辰を女菩薩と思ひしは第一の過り、折疵を隠して刀には樋を彫るものあり、根
 性が腐つて虚言美しく、田原が持て来た手紙にも、御なつかしさ少時も忘れず何れ近き中
 父様に申し上やがて朝夕御前様御傍に居らるゝよう神かけて祈り居りなどと我を
 嬉しがらせし事憎し憎しと、怨の眼尻鋭く、柱にもたれて身は力なく下たる頭少し上なが
 ら睨むに、浮世のいざこざ知らぬ顔の彫像寛々として大空に月の澄る如く佇む気高さ、
 見るから我胸の疑惑耻しく、ホツと息吐き、ア、誤てり、是程の麗わしきお辰、何とてさ
 もしき心もつべき、去し日亀屋の奥坐敷に一生の大事と我も彼も浮たる言葉なく、互に飾
 らず疑わず固めし約束、仮令天飛ぶ雷が今落ればとて二人が中は引裂れじと契りし者を、
 よしや子爵の威権烈しく他し聳がね定むるとも、我の命は彼にまかせお辰が命は珠運貫い
 たらば、何の命何の身体あつて侯爵に添うべきや、然も其時、身を我に投懸て、艶やか

なる前髪惜気もなく我膝に押付、動氣可愛らしく泣き俯しながら、拙き妾めを思い込
 まれて其程までになさけ厚き仰せ、冥加にあまりてありがたしとも嬉しとも此喜び申
 すべき詞知らぬ愚の口惜し、忘れもせざる何日ぞやの朝、見所もなき櫛に数々の花彫付
 て賜わりし折より、柔しき御心ゆかしく思い初、御小刀の跡匂う梅桜、花弁一片も
 欠せじと大事にして、昼は御恩賜頭に挿しかざせば我が玉の冠、かりそめの立居に
 も意を注て落るを厭い、夜は針箱の底深く蔵めて枕近く置ながら幾度か又開て見て漸く
 睡る事、何の為とは妾も知らず、殊更其日叔父の非道、勿体なき悪口計り、是も妾め故
 思わぬ不快を耳に入れ玉うと一胸先に痛く、さし詰る癩押えて御顔打守しに、
 暢やかなる御気象、咎め立もし玉わざるのみか何の苦もなくさらりと埒あき、重々の御恩
 荷うて余る甲斐なき身、せめて肩揉め脚擦れとでも僕使玉わばまだしも、却て口き、玉う
 にも物柔かく、御手水の温湯椽側に持て参り、楊枝の房少しむしりて塩一小皿と共
 に塗盆に載せ出す僅計の事をさえ、我夙起の癖故に汝までを夙起さして尚寒き
 朝風につれなく袖をなぶらす痛わしさと人を護う御言葉、真ぞ人間五十年君に任せて露
 惜からず、真実あり丈智慧ありたけ尽して御恩を報せんとするに付て慕わしさも一入ま
 さり、心という者一つ新に添たる様に、今迄は関わざりし形容、いつか繕う気になつ

て、髪ゆいの結よう様ほめどうしたらら誉ほめらりようかと鏡むかに對むかつて小聲こゑに問とい、或夜あるばんの湯ゆ上あり、耻はずしながらソツうすげと薄化粧うすげしして怖こわ怖こわ坐敷ざしきに出いでしが、笑片類わらかたはに見みられし御眼めも元何もとやら存あるようにに覺さえて、人知ひとらずカツと上ひと氣えせしも、単ひとに身み嗜み計だにはあらず、勿も体たなけれど内ない内ないは可愛かわゆがられても見たみたき願ねがい、悟さとつてか吉兵衛きちべゑ様の貴下あなたとの問答もんた、婚く礼れせよせぬとの争まい、ふふとたちぎき不ふ図ず立たち聞きいて魂たま魄しゆらくと足定さだまらず、其儘そのま其処そこを逃にげ出し人ひとなき柴部屋しばべやに夢むの如ごとく入いると等ひとしく、せぐりくる涙なみ、あなた程ほどの方かたの女房にようばとは我身わがみの為ためを思おもわれてながら吉兵衛きちべゑ様の無礼過なめすぎた言葉恨にくめしく、水仕女みずしめなりともして一生御傍おそばに居ゐられさいすれば願望のぞみは足ある者ものを余計あまな世話世話、我われからでも言いわせたらるように聞取ききとられて疎うとまれなば取とり返かしのならぬあかつき暁あかつき、辰たつみは何なにになつて何なにに終おるべきと悲かなしみ、珠運たまご様さまも珠運たまご様さま、余あまりにすげなき御言葉ごごも、小兒こどもの捉とたと小雀こすずめを放はなして遣やつた位くらいに辰たつみを思おもはるゝか知らねどと泣なきしが、貴下あなたはそれより黙だんまり言ごで亀屋かめやを御立おたちなされしに、十日もか妨たり溜ため草くさを一日いちにちに焼やいたような心地こころして、尻しつぽにでもなるより外ほかなき身の行末なげを歎なげしに、馬籠まごめに御病氣ごびやうきと聞きく途端つたん、アツと驚おどり傍そばに愚おろかな心こころからは看病くわんぱくするを嬉うれしく、御介抱ごせう申まうしたる甲斐かいありて今日けふの御床ごとこ上あげ、芽出度めでたいは芽出度めでたいれど又またもや此このま儘まま御立おたちかと先刻さつきも台所だいしよで思おもい屈かして居ゐたるに、吉兵衛きちべゑ様御内儀ごうちぎが、珠運たまご様との縁つ続づぎ度たぐば其人様そのひとさまの髪かみ一筋知れぬように抜ぬいて、おまえの髪かみと確しつかかり結あわせあわせあわせあ※如律令あわきゆうきゆまりつりようと唱となえて

谷川に流し捨るがよいとの事、憎や老嫗の癖に我を黽らるゝとは知ながら、貴君の御足^しを止度^{とめた}さ故に良事^{よいこと}教られしよう覚て馬鹿^{おぼえ}気たる呪^{まじない}も、試て見ようかとも惑う程小き胸^{くるし}の苦く、捨らるゝは此身の不束^{ふつつか}故か、此心の浅き故かと独り悔しゆう悩んで居りましたに、あり難き今の仰せ、神様も御照覽あれ、辰めが一生はあなたにと熱き涙^{わがきもの}吾衣物を透せしは、そもや、嘘^{うそ}なるべきか、新聞こそ当^{あて}にならぬ者なれ、其^{それ}を真^{まこと}にして信^{まこと}ある女房を疑いしは、我ながらあさましとは思ふものゝ形なき事を記すべしとも思えず、見れば業平侯爵とやら、位貴^{たつと}く、姿うるわしく、才いみじきよし、エ、妬^{ねた}ましや、我位^{われ}なく、姿美しからず、才もまた鈍ければ、較^{くらべ}られては敵手^{あいて}にあらず。扱^{さて}こそ子爵が詞^{ことば}通^{とお}り、思想も発達せぬ生若^{なま}い者の感情、都風の軽薄に流れて変りしに相違なきかと頻^{しきり}に迷い沈みけるが思いかねてや一声^{はげ}烈しく、今ぞ知^{しつ}たり移ろい易^{やす}き女心、我を侯爵に見替^{みかえ}て、汝一人の榮華^{ほこ}を誇^{なげ}る、情なき仰せ、此辰^{この}が。

アツと驚き振^{ふり}仰^{あおむ}向^{むけ}ば、折柄^{おりから}日は傾きかゝつて夕榮^{ゆうばえ}の空のみ外に明るく屋^やの内静^{しずか}に、淋し気に立つ彫像^{ばか}計^けり。さりとは忌々^{いまいま}し、一心乱れてあれかこれかの二途^{ふたみち}に別れ、お辰が声を耳に聞^きしか、吉兵衛の意見^きひしゝと中^{あた}りて残念や、妄想^{もうそう}の影法師に馬鹿^{おのれ}にされ、有^{あり}もせぬ声まで聞^きし愚^{おろか}さ、簡程^{かほど}までに迷わせたるお辰め、汝も浮世の潮に漂^{うき}う浮萍^{うきくさ}

のような定なき女と知らで天上の菩薩と誤り、勿体なき光輪まで付たる事口惜し、何処の業平なり癩病なり、勝手に縁組、勝手に楽め。あまりの御言葉、定めなきとはあなたの御心。あら不思議、慥に其声、是もまだ醒ぬ無明の夢かと眼を擦つて見れば、しよんぼりとせし像、耳を澄せば予て知る樅の木の蔭あたりに子供の集りて鞠つくか、風の持来る数え唄、

一寸百突で渡いた受取ったく、一つでは乳首啣えて二つでは乳首離いて三つでは親の寝間を離れて四つにはより糸より初め五では糸をとりそめ六つでころ機織そめて――

と苦労知らぬ高調子、無心の口々長閑に、拍子取り連て、歌は人の作ながら声は天の籟美しく、慾は百ついて帰そうより他なく、恨はつき損ねた時罪も報も共に忘れて、恋と無常はまだ無き世界の、楽しさ羨しく、噫無心こそ尊けれ、昔は我も何しらすの清きばかりの一筋なりしに、果敢なくも嬉しいと云う事身に染初しより、やがて辛苦の結ばれ解ぬ濡芋の縫の物思い、其色嫌よと、眼を瞑げば生憎にお辰の面影ありくと、涙さしぐみて、分疏したき風情、何処に憎い所なし。なる程定めなきとはあなたの御心、新聞一枚に堅き約束を反故となして怒り玉うかと啣たれて見れば無理ならねど、子爵の許に行てより手紙は僅に田原が一度持て来りし計り、此方から遣りし度々の消息、初は親子再会の祝

中頃は振残されし、唧言、人には聞せ難きほど耻しい文段までも、筆とれば其人の
 耳に付て話しする様な心地して我しらず愚にも、独居の恨を数うる夜半の鐘はつらから
 で、臍気ながら逢瀬うれしき通路を堰く鷄めを夢の名残の本意なさに憎らしゆう存じ
 候など書てまだ足らず、再書濃々と、色好み深き都の若伎を幾人か迷わせ玉う
 らん御標致の美しさ、却つて心配の種子にて我をも其等の浮たる人々と同じ様に思し出
 らんかと案じ候ては実にく頼み薄く口惜ゆう覚えて、あわれ歲月の早く立かし、御
 おもかげの変わりたる時にこそ浅墓ならぬ我恋のかわらぬ者なるを願したけれど、無理な
 る願をも神前に歎き聞え候と、愚痴の数々まで記して丈夫そんな状袋を掴み、封じ目油断
 なく、幾度か打かえしく見て、印紙正しく張り付、漸く差し出したるに受取たと計の返
 辞もよこさず、今日は明日はと待つ郵便の空頼なる不実の仕方、それは他し婿がね取
 らせんとて父上の皆為されし事。又しても妄想が我を裏切して迷わする声憎しと、頭を
 上れば風流仏悟り済した顔、外には
 清水の三本柳の一片の雀が鷹に取られたチチャポンく一寸百ついで渡いた渡いた
 の他音もなし、愈々影法師の仕業に定まつたるか、エ、腹立し、我最早すつきりと思
 い断ちて煩惱愛執一切棄べしと、胸には決定しながら、尚一分の未練残りて可

愛わければこそ睨にらみつむる彫像、此時雲取り、日は没いりて東窓の部屋の中うちや、暗く、都すべて
 の物薄墨色になつて、暮残りたるお辰白き肌浮うきいず出る如く、活いきいき々とした姿、朧月夜に真
 の人を見る様ように、呼ばゞ答もなすべきありさま、我わが作りたる者なれど飽あくまで溺おぼれ切たる珠
 運たまと総身の毛も立て呼吸いきをも忘れ居たりしが、猛然として思い翻かえせば、凝こつたる瞳ひとみキラ
 リと動く機会はすみに面色たちま忽ち変り、エイ這しやつつら顔の美しさに迷う物かは、針ほども心に面白おもしろき
 所あらば命いのちさえ呉くれてやる珠運も、何の操なきおのれに未練残すべき、其生そのなま白けたる素そつく
 首見びみも穢けがらわしと身動きうしろむきあらく後うしろむき向むかになれば、よゝと泣声して、それまでに疑うとわれ疎
 まれたる身の生甲斐いきがいなし、とても的事方かたさま様の手に惜おしからぬ命捨すてたしと云いは、正しく木像
 なり、あゝら怪しや、扱さては一念の恋を凝こらして、作り出いせしお辰の像に、我魂いのちの入いりたるか、
 よしや我身の妄もうしゆう執のの憑のり移りたる者にもせよ、今は恩愛切きつて捨すて、迷まよわぬ初はじめに立たち帰かえる
 珠運たまに妨さまたげなす妖怪ようかい、いでいで仏師が腕うでの冴さえ、恋も未練も段々きだきだに切きり捨すてれんと突つ立たち
 て、右の手高く振ふりあげ上し鉈なたには鉄をも砕くべきが氣高く仁やさしき情溢なさけあふる計はかりに湛たゆる姿、さ
 ても水々として柔かそうな裸はだか身かみ、斬きらば熱血も迸ほとほしりなんを、どうまあ邪見よこしまに鬼おに々おにしく
 刃やいばの酷こくあてらるべき、恨うらみも憎にくみも火上の氷、思おもわず珠運は鉈取なたとり落おして、恋の叶おもわず思おもの
 切れぬを流石男さすがの男泣なき、一声呑のんで身をもがき、其儘そのまドウと臥ふす途端、ガタリと何かの

倒るゝ音して天より出し、地より湧し、か、玉の腕は温く我頸筋にからまりて、雲の鬢の毛匂やかに頬を摩るをハット驚き、急しく見れば、有し昔に其儘の。お辰かと珠連も抱しめて額に唇。彫像が動いたのやら、女が来たのやら、問ば拙く語らば遅し。玄の又玄摩訶不思議。

団円 諸法実相

帰依仏の御利益眼前にあり

恋に必ず、必ず、感応ありて、一念の誠御心に協い、珠運は自が帰依仏の来迎に辱なくも拯いとられて、お辰と共に手を携え肩を駢べ優々と雲の上に行し後には白薔薇香薫じて吉兵衛を初め一村の老幼芽出度とさゞめく声は天鼓を撃つ如く、七蔵がゆがみたる耳を貫けば是も我慢の角を落して黒山の鬼窟を出、発心勇ましく田原と共に左右の御前立となりぬ。

其後光輪美しく白雲に駕て所々に見ゆる者あり。或紳士の拝まれたるは天鷲絨の洋服裳長く着玉いて駄鳥の羽宝冠に鮮なりしに、某貴族の見られしは白襟を召て錦の御帯金色赫奕たりしとかや。夫に引変え破襪袍着て藁草履はき腰に利鎌さしたる

を農夫は拝み、阿波縮あわぢぢみの浴衣ゆかた、綿八反めんはつたんの帯、洋銀かんざらの簪位かんざらの御姿を見しは小商人こあきんどにて、
 風寒かぜき北海道ほくかいにては、鱧にしんろうこの鱗怪うたがしく光るどんざ布子ぬのこ、浪なみさやぐ佐渡さどには、色も定かならぬ
 さき織オリを着て漁師共の眼めにあらわれ玉いけるが業なりひらこうしやく平侯へいこう爵しやくも程経ほどて踵かかと小さき靴くつをはき、
 派手はでなりボンの飾りまばゆき服を召まされたるに値偶ちくうせられけるよし。是皆これ一切経いっさいきようにも
 なき一体の風流仏、珠運しゆんが刻うみたと同じ者の千差万別せんさばんべつの化身けしんにして少しも相違さむなければ、
 拝たみし者たれ誰も彼も一代いちだいの守本尊まもりほんぞんとなし、信仰しんぎやう篤あつき時は子孫しよん繁はんじよう昌ちやう家内和睦わぼく、御利益ごりやく
 疑うたがなく仮令かじ少々御本尊ごほんぞん様を恨うらめしき様ように思おもう事ありとも珠運しゆんの如ごとくそれを火上かみの氷ことなす
 者ものには素もとより持前もちまえの仏ほとけ性しやうを出いだ玉たまいて愛護あいごの御誓願ごせいがん空むなしからず、若も又過あやつてマホ
 メツト宗しゆうモルモン宗しゆうなぞの木偶もくぐう土像どざうなどに近ちかづく時は現当げんとう二世にせの御罰おんばちあらたかにして
 光輪ごこうを火輪かりんとなし一家いっけをも魂魄こんぱくをも焼やき滅ほし玉たまうとかや。あなかしこ穴賢あなしこ。

青空文庫情報

底本：「日本の文学 3 五重塔・運命」ほるぷ出版

1985（昭和60）年2月1日初版第1刷発行

底本の親本：「風流仏」吉岡書籍店

1889（明治22）年9月発行

入力：kompass

校正：今井忠夫

2003年12月8日作成

2014年7月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風流仏

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>